

江戸時代の農書及び本草書類に記載されて いるサトイモの品種及び品種群について

宮崎 貞巳・田代 洋丞

(生物工学講座)

平成3年10月31日 受理

On the Cultivar and Its Group of Taro
(*Colocasia esculenta* Schott and *C. gigantea* Hook. f.)
Described in the Books on Husbandry and Herbals in the Edo Era.

Sadami MIYAZAKI and Yousuke TASIRO
(Laboratory of Biotechnology and Plant Breeding)

Received October 31, 1991

Summary

There are about 140 cultivars including the synonyms of taro in Japan, and they are divided into 15 groups according to the morphological characters.

This paper is an attempt to identify the taro cultivars described in the books on husbandry and herbals in the Edo era, in order to obtain the fundamental data on the introduction, the distribution and the fate of these cultivars. 'Nihon-nosho-zenshu', 35 vols. (a complete work series on husbandry in the Edo era) ed. by Tatu Yamada *et al.*, pub. by Nōsangyoson-bunkakyōkai in 1977-1989 and 12 herbals in the Edo era were used as the works.

In the present study, the cultivars with the same name were taken up from the works in which they had been described and the interpretations of their characters were compared with those described in the literatures cited and the findings of the existing cultivars by the authors. The identification of the cultivar and its group was based mainly on these names in 'Sosaiengei-kakuron' (a book on details of Japanese vegetables) written by Saburo Kumazawa, pub. by Yokendo in 1967.

The taro cultivars had been described in 31 out of 125 works examined, the numbers of the cultivars being about 80 in total. There were no apparent differences in the numbers of the cultivars described in each work between the ages and the distincts of production of the works or between the books on husbandry and the herbals.

In general, the groups with many identified cultivars were as follows: 1) having been used both their corms and petioles for food, 2) having been introduced as early as the others, 3) being widely distributed, 4) showing distinct morphological differences, 5) having been clearly described on their morphological characters in the works examined.

The numbers of the works in which the identified cultivars had been described were 28 on Hasu-imo group, 13 on Tōno-imo group, 11 on Egu-imo group, 8 on Hasuba-imo group, 5 on Yatsugashira group, 2 on Akame group and 1 on each group of Kurojiku, Migashiki and Mizo-imo.

The cultivars belonging to 6 groups, namely, Okinawa-aoguki, Ishikawawase, Dodare, Shoga-imo, Binroshin and Takenoko-imo, had not been described in any works and if any, could not make them clear the relationships with the existing cultivars. However, some cultivars of 12 groups except for Okinawa-aoguki group, Binroshin group and Takenoko-imo group seem to have been introduced into Japan by the Edo era, judging from the descriptions in the literature cited.

A cultivar belonging to each group of Hasu-imo, Egu-imo and Yatsugashira had been described in the oldest book on husbandry 'Seiryoki' produced in Iyo (Ehime Prefecture) during 1629 to 1654 and a cultivar of Tōno-imo group done for the first time in 'Hyakusyo-denki' produced in Tōtōmi to Mikawa (Shizuoka Prefecture) by 1688, and a cultivar of Hasuba-imo group done in 'Honchoshokkan' published in Edo (the City of Tokyo) in 1697.

Key words: taro, *Colocasia esculenta*, *Colocasia gigantea*.

緒 言

サトイモは、インド⁵⁾、インド東部³⁴⁾、東ネパール⁵⁵⁾、東南アジア³⁴⁾、中国西南地域²⁵⁾に野生し、インド(北西インドとパンジャブを除き、アッサムとミャンマーを含む)⁵¹⁾やタイのチャオプラヤ河中流域からミャンマー側⁵⁰⁾で栽培化されたと推測されている。このように、サトイモは熱帯及び亜熱帯原産の植物で、わが国の自然条件下では夏期には生育可能であるが、冬期には地上部、地下部ともにほとんどの地域で枯死する。また、わが国の現存のサトイモは、一部の品種しか開花せず、それらが開花しても結実しないので、交雑によって、わが国で育成されたとは考え難く、むしろ、現存の品種そのもの、あるいは、それらの祖先となる品種が人手によって熱帯や亜熱帯地方から直接、あるいは近隣諸国を経て導入されたと考えるのが妥当であろう。

サトイモの遺物は今日までわが国でも、また、外国でも全く発見されていないので、考古学的にはサトイモがわが国へ導入された時期は不明である。しかし、生態学や民俗学、あるいは比較民族学の立場から「照葉樹林焼畑農耕文化」の極めて重要な構成要素の一つとして、わが国の稲作農耕が始まる以前に導入されたと推定されている³⁷⁾。

サトイモに関するわが国最古の記録は『風土記』にみられる。出雲国では数個所でサトイモ(芋, 芋菜)が認められており、豊後国では白い鳥が餅に変わり、その餅が沢山のサトイモ(芋草)の株となり、葉や花をつけて冬でも繁茂したと記されている。また、万葉集には、「蓮葉はかくこそあるもの、意吉麻呂が家なるものは宇毛の葉にあらし」と詠まれている。これらの記録から、サトイモは遅くとも8世紀までには、わが国の各地に分布していたことがうかがわれる。

サトイモの品種名を記載したわが国最古の書物は918年に成立した『本草和名』⁶⁾である。この第十七巻 菓(の部)にはサトイモが「芋」と記され、和名で「以倍都以毛」と呼ばれ、中国の『本草集注』や『廣志』から引用した「青芋」、「紫芋」、「真芋」、「白芋」、「連禪芋」、「野芋」(「存鴉」)、「君子芋」、「車轆芋」、「鋸子芋」、「青邊芋」、「蔓縁芋」、「鷄子芋」、「百果芋」、「早芋」、「九百芋」、「家控芋」、「曹芋」、「百子芋」、「魁芋」(「長味」、「談善」)の合計19品種があげられている。これらの品種のなかには17世紀以降のわが国の農書や本草書類に記載されているものもあるが、10世紀までにわが国へ導入されていたかどうかについては不明である。しかし、5世紀以降の新羅や百済との交流や607年から838年までの遣隋使・遣唐使の10数次にわたる派遣、6世紀前半に成立した中国の農書『齊民要術』の奈良時代以前の渡来⁴⁹⁾などを考えると遅く

とも10世紀初頭までにはいくつかの品種が導入されていたとも推測される。

また、927年に成立した『延喜式』⁷⁾の巻二十九 内膳司には、内膳司が管理していた畑でサトイモが栽培されていて、段当り2石の種芋が必要で、耕起、植付け、肥培・管理、収穫・調整などの労働力として総計35人を要することが述べられ、供奉雑菜として、毎日、芋茎2把（6—9月の間）、芋子2升などがあげられている。また、巻七 神祇には、大嘗祭に阿波国から蹲イモ鵜15篋が献上されたことが記されている。また、『倭名類聚鈔』²⁹⁾には「芋類」として「芋」（附蕈）などをあげ、『四聲字苑』に記されている「芋」は和名で「以閉都以毛」と呼び、『唐韻』の「蕈」は「芋茎」で、和名では「以毛加良」、一名「以毛之」、俗に云う「芋柄」であることが述べられている。これらの記述を総合すると、当時、親芋用品種、子芋用品種、葉柄用品種の3種類が、あるいは親子兼用品種と葉柄用品種が栽培されていたことが推察される。

しかしながら、品種名あるいは品種群名の確かな記録は17世紀以降の農書や本草書その他（以下、本草書類と呼ぶ）による以外に現在のところ知る手掛りはない（1597年成立の『易林本節用集』の「根芋」は軟白栽培用の品種名か、軟白栽培されたサトイモの芽か不明）。

本報は、わが国におけるサトイモ品種の導入、分布、変遷に関する基礎的資料を得る目的で、17世紀以降の農書及び本草書類に記載されているサトイモの品種と現存品種・品種群との関係について検討したものである。

調査資料

調査に使用した農書はすべて山田龍夫・飯沼二郎・岡 光夫・守田志郎編 日本農書全集全35巻 農山漁村文化協会 1977—1989年刊である。また、本草書類のなかで調査した資料は以下に示す通りである。

- 黒川道祐 1684 野間光辰編 雍州府志 1968 臨川書店
人見必大 1697 島田勇雄訳 本朝食鑑 1978 平凡社
貝原益軒 1701 伊東尾四郎校訂 筑前国続風土記 「福岡県史資料」続第4輯 1988 文献出版
貝原益軒 1709 白井光太郎考証 大和本草 1980 有明書房
寺島良安 1712 和漢三才図会刊行委員会編 和漢三才図会 1975 東京美術
貝原益軒 1714 花譜・菜譜 1973 八坂書房
越谷吾山 1775 古典資料研究会編 物類称呼 1972 藝林舎
中村惕斎 1789 頭書増補訓蒙図彙大成 寛文版 九臯堂
小野蘭山 1803—1806 杉本つとむ編 本草綱目啓蒙 1974 早稲田大学出版部
曾 槃 1804 鹿児島藩蔵版 成形図説 1933 国本出版
岩崎灌園 1830—1844 北村四郎監修 本草図譜 1980—1981 同朋舎
飯沼慾齋 1856—1862 牧野富太郎増訂 草木図説 1912 成美堂

調査方法

1. 調査した農書のなかにはサトイモの記載を欠くものがあつた。サトイモについて記載された資料をもとに、サトイモの総称名の時代的変遷を調べた。

2. サトイモの品種名を記載した資料をもとに、同一品種名を抽出し、それらについて記述されている特性と著者の現存品種についての特性調査結果及び引用文献に記述されている特性

とを相互に比較検討して、資料中の品種が現存品種・品種群の何れに相当するかを判別した。なお、現存品種名・品種群名の表記は、特に断らない限り熊澤²³⁾の「里芋の品種分類表」中の名称に基づいた。本報ではこの表を一部改変して第3表としてあげた。

3. 資料中のサトイモの総称名及び品種名は、資料に記された文字を用い、「」を付けて表し、明治時代以降の文献中の品種名には‘ ’を附けた。また、引用文中の〔 〕内は著者が加筆したものである。

調査結果及び考察

1. 資料中のサトイモの呼称について

調査した農書・本草書類、合計125編のなかで、サトイモについて記載した資料は、第1表に示す通り、69編であった。

現在、わが国でサトイモと総称する場合、主として球根を食用とするいわゆるサトイモ *Colocasia esculenta* Schott の他に、葉柄を専ら食用とするハスイモ *Colocasia gigantea* Hook. f. も含めるが、調査した資料でも、これら2種を含めた総称名が用いられている場合が多かった。

ただ、その総称名には時代的変遷が認められた。すなわち、17世紀及び18世紀の資料では、それぞれ86%、83%が「芋」を用い、19世紀の資料では「芋」、「里芋」、あるいは「芋」と「里芋」を併用したものがそれぞれ45%、24%、21%で、時代が新しくなるにつれ、次第に「里芋」の呼称が多くなる傾向があった。

サトイモという呼称について、白井⁴²⁾は『和名鈔』に初出すると述べているが、前述のように、『和名鈔』には「芋 和名 以閉都以毛」と記されているにすぎない。『成形図説』は「里芋」の出典を『多識編』と記し、下川³⁹⁾は「多識篇、和漢三才図会等には里芋とあり、対山芋名之と云ふ」と述べている。

林羅山⁹⁾の自筆草稿『羅浮涉獵抄多識編』には「芋^{イヘイモ}」とだけあり、『寛永七年刊古活字「多識編」』及び『寛永八年刊整版本「多識編」』には「芋 伊毛又曰伊恵乃芋」と記され、刊年不明の『改正増補多識編』には「芋 和名 伊毛^{イモ} 又曰伊恵乃伊毛^{イヘイモ} 増補 左土伊毛^{サトイモ}」と出ている。従って、サトイモは早くても1631年以降から「サトイモ」と呼ばれるようになったのではないかと推定され、調査した資料のなかで、総称名として初めて「里芋」をあげているのは、成立年代が1688年以前と推定されている『百姓伝記』である。

なお、1735—1736年に編纂された『産物帳』（本報では、盛永俊太郎・安田健編著 江戸時代中期における諸藩の農作物——享保・元文諸国産物帳——³³⁾を『産物帳』と呼ぶ）では、「サトイモ」を総称名としている地域が26地域のうち9地域（35%）、品種名・品種群名としている地域が17地域であった。

19世紀には総称名として「芋」及び「里芋」の他に、「田芋」が『耕耘録』（土佐）、『家業伝』（和泉）及び『農具揃』（飛騨）で用いられている。この呼称は現在でも愛知、高知、大阪、福井、岐阜など16府県の一部で使用されている²⁾。また、調査した琉球の農書には、サトイモの総称名はみられず、「鶴之子」、「つんぬく」、「田芋」とあり、前二者は畑栽培用のサトイモの呼称で、後者は水田に栽培されるサトイモを指し、現在でもこのように区別した呼称が用いられている⁵²⁾。

2. サトイモの品種名が記載されている資料

第1表にあげた69編の資料のうち31編にサトイモの品種名が記載されていた。これらの資料

第1表 続き

資 料 名	資 料 成 立		サトイモの 総 称 名	サトイモの品種 名記載の有無
	年 代	地 域		
農 要 録	1835	肥 前	(種類名のみ)	有
耕作早指南種稽歌	1837	若 狭	芋	無
年々種蒔覚帳	1837	相 模	芋	無
西村外間筑登之親雲上農書	1838	琉 球	(鶴之子)	無
農 家 年 中 行 事 記	1839	越 後	里芋	無
耕作仕様書	1839—1842	武 蔵	芋	有
農 業 蒙 訓	1840	若 狭	里芋	無
農業功者江御問下ケ十ヶ條…	1841	周 防	(種類名のみ)	有
農 業 自 得	1841	下 野	里芋, 芋	無
家 業 伝	1842	和 泉	田芋, 泥芋	無
肥後国耕作聞書	1843	肥 後	里芋	無
輕 邑 耕 作 書	1847	陸 中	芋	無
自家業事日記	1849	因 幡	里芋	無
農 業 年 中 行 事	1851	周 防	(種類名のみ)	有
亀 尾 疇 圃 栄	1855	松 前	(種類名のみ)	有
広 益 国 産 考	1859	遠 江	芋, さといも	無
農 稼 附 録	1859	尾 張	芋	無
精 農 録	1860	下 総	芋	無
地下掛諸品出書	1862	岩 代	芋	無
草 木 図 説	1862		イモ, サトイモ	有
農 具 揃	1865	飛 騨	田芋	無
菜園温古録	1866	常 陸	芋, 里芋	有
安里村農書高良筑登之親雲上	不明	琉 球	(田いも, つんぬく)	無
阿州北方農業全書	不明	阿 波	芋	無

第2表 農書・本草書類に記載されているサトイモの品種名

資 料 名	品 種 名
清 良 記	八花芋, はう子芋, 大芋, 白唐芋, 黒唐, つし芋, 真芋, 柄白芋, 永芋, 丸芋, 霜芋(露芋), 実赤芋, 嶋芋
会 津 農 書	白芋, 黒芋, エグ芋, 唐芋
雍 州 府 志	唐ノ芋
会 津 農 書 附 録	大しんずい, 小しんずい, 小いも, とふ芋, くりいも, しろいも(しれ芋), ゑく芋(花咲)
百 姓 伝 記	とうのいも, 蓮いも, くりいも, 十里いも, 嶋いも, 青から, ゑごいも, はじかミいも, つくミいも
農 業 全 書	つるの子, 栗いも, 赤いも(赤芋), 大いも, 蓮芋(白芋)
本 朝 食 鑑	菱芋, 青芋, 蓮芋, 栗芋
筑前国続風土記	青芋, 黒芋, つるの子(大つる, 小つる), 白芋, 大芋(ほら芋), 赤芋, 栗芋, 野芋
耕 稼 春 秋	里芋, 唐ノ芋(唐の芋, 赤すいき), 真芋
大 和 本 草	ツルノコ(大, 小2品種), 青芋, 黒芋, 大芋(ホラ芋), 赤芋, 蓮芋(栗芋), 唐芋(白芋), 野芋
和 漢 三 才 図 会	粒芋, 唐芋, 青芋(菱芋2品種), 真芋, 蓮芋
菜 譜	つるの子, 青芋, 黒芋, 白芋(唐芋), 赤芋, 大芋(法螺芋), くりいも(はす芋), 野芋

第2表 続き

資 料 名	品 種 名
物 類 称 呼	唐芋(女芋), 蓮芋(ハツがしら, 栗芋)
農 事 弁 略	白芋, 嶋芋, とふの芋
私 家 農 業 談	白芋, 赤芋, 真芋(蔓ノ子芋), 青芋, 黒芋, 大芋, 法螺芋, 栗芋(蓮芋), 紫芋, 水芋
本 草 綱 目 啓 蒙	青芋(サトイモ, 一名ハタケイモ, エグイモ, ハタイモ), 紫芋(トウノイモ, 一名ランナイモ, アカイモ, クロドウ, ボドウ), 真芋, 白芋(ハスイモ, 一名クリイモ), 蓮芋(ホライモ), 野芋(クハズイモ, イシイモ, ドクイモ)
成 形 図 説	鶴児芋, 早芋, 美賀志伎芋(野菜芋, ひき芋), 赤芋(赤いも, 紫芋), 都芋, 真芋, 臺乃芋, 栗芋(2種類), 八頭芋(八口, 親せ賀美芋, 切芋, 赤嶋芋), 穴芋, 音頭芋, 霜芋(島芋, 根芋, 莖芋, 芋卵), 蓮芋(臺乃芋, 白芋), 海芋(石芋, 毒芋, 芭蕉芋, 野芋)
農 家 業 状 筆 録	里芋, からくろ, 蓮芋
粒 々 辛 苦 録	とう芋
農 業 談 拾 遺 雜 録	青芋
山本家百姓一切有近道	まいも, 唐の芋, をやせいも
北越新発田領農業年中行事	とう芋, 蓮芋, から喰ひいも
本 草 図 譜	紫芋(あかいも, とうのいも, あかから), 九面芋(やつかしら), くろいも(くろから), 百果芋(くりいも), 白芋(しろいも, 江戸のくりいも), 水芋(みついも, ミやこいも, たけいも), 青芋(さといも, はたけいも, あをから), はすいも, 煮くいも, 野芋(いしいも, くはすいも, とくいも)
砂 畠 菜 伝 記	里芋(鶴ノ子(親抱き), 長崎いも(南京いも, 上座芋)), 赤いも, 白いも(はすいも, からいも)
農 要 録	里芋, 赤芋
耕 作 仕 様 書	とうの芋, ハツ頭いも, わせ芋(夏芋), 赤から芋, 栗芋(小さいも, 股黒), とたり(つるの子, はかいも), いごいも(花いも), 蓮芋(5種類)
農業功者江御問下ケ十條…	白芋, 赤芋, 蓮芋
農 業 年 中 行 事	里芋, 赤芋
亀 尾 嚙 圃 栄	白芋
草 木 図 説	マイモ, オヤセタゲ, エグイモ, エグナイ, タケイモ(傀儡芋), ハスイモ(白芋), タウノイモ(紫芋), ヤツガシラ(九面芋), ヤマトイモ(アイサ), 水イモ
菜 園 温 古 録	早芋, 蓮芋

と品種名は第2表に示した通りである。品種名数は全体で約80で、各資料に記載されたそれらの数は、資料成立の時代や地域、あるいは、農書と本草書類との間に一定の傾向は認められず、最小1から最多14まで様々であった。

3. 資料中の品種と現存品種・品種群との関係

第2表にあげた品種名のなかから同一品種名を抽出し、「調査方法」の項で述べた基準によって現存品種・品種群のいずれに該当するかについて同定し、その結果を以下に述べると共に、第4表にあげた。なお、この表では、判別できなかった品種については棒線(——)で示した。

(1) 唐芋

トウノイモの品種名あるいは品種群名は、現在、「唐芋」あるいは唐芋群と漢字を用いて表す。しかし、資料では「唐」と「芋」との間に「の」あるいは「ノ」を挿入したものや仮名で表したものがみられた。

第3表 サトイモの品種分類

〔熊澤 (1967)²³⁾より一部改変〕

品 種 群	代表品種	同種異名または類似品種	倍数性
薺 芋	薺 芋	薺芋, 稲橋在来, 出雲塩治, とべ芋, 河ずいき, 河内芋, 紀州芋, 島芋, 美作芋, 京都2号, 栗芋, 太芋, 振草, 天王, 団子芋, 盆芋, 青芋, 小鳥, 奉化芋(上海)	3 x
沖縄青茎	沖縄青茎	沖縄青茎	2 x
蓮 葉 芋	早生蓮葉芋	蓮葉芋, 蓮芋, 衣被, 石川早生, 水芋, 草深芋, 八幡芋, 静岡早生, 女早生, 文化芋, 弥市芋, 黄芋, 遠州, 笹倉, 白芋, 大土垂, 新郷土垂, 安行水芋, 蓮芋, 奉化種B(中国), 台湾白	3 x
	中生蓮葉芋	日田1号	3 x
石川早生	石川早生丸	石川早生, 甲州早生, 文久早生, 白茎京芋, 京芋13, 鈴芋, 渋川, 襟掛芋, 愛媛早生, 丸子芋, 栗田, 深芋, 高座芋, 浅木, 日田早生, 熊野早生, 親實, 鶴の子, 八幡芋, 富岡早生	3 x
	石川早生長	高座早生, 京早生3号, 在来晩生, 神玉, 東京早生, 早生1本	3 x
土 垂	早生丸土垂	六月芋, 広島芋, 土垂, 早生芋, 寒残り, 大和, 井桁早生, 愛知早生, 白鳥, 早生丸, ジラ, 北京A114(中国), ビヤナン社コマイカル(台湾), 早生真芋, 豊後	3 x
	早生長土垂	蓮葉芋, 伝燈寺, 親實, 赤山芋, 大阪泉南種, 南京A(中国), シカミ芋(台湾), 鉄砲芋, 吉野芋, 早生芋	3 x
	中生丸土垂	早生土垂, 京都早生, 小姫, 六月芋, 白芋, 白早生芋, 白茎早生, 熊野, 中生土垂, 二宮18号, 文山群ラハウ社(台湾)	3 x
	中生長土垂	八重蔵, 土垂, 熊高郡パーラン社(台湾), 北京204(中国), 三州, 御厨, 坂本在来, 鶴の子, 高雄1号(台湾), 上海13(中国), 奉化種(中国)	3 x
	晩生長土垂	三保早生, 白芽早生, 白芽晩生, チャマサイ(台湾), ガオガン蕃社(台湾), 台湾土垂(台湾), 与五郎芋, 上座芋, 中生真芋, 円蕃, 群蕃, 南溪テキス社, 東勢郡雲山杭社(台湾)	3 x
黒 軸	黒 軸	黒軸, 早生赤芽, 赤桿, 赤ずいき, 朝鮮(朝鮮)	3 x
	水戸黒柄	水戸黒柄	3 x
	烏 播	烏播(台湾)	3 x
	太湖芋	太湖蕃マバトワン社, 太湖郡北勢蕃マビハル社(台湾)	3 x
赤 芽	赤 芽	赤芽, 鬼赤, 大野芋, 都芋, 沖縄芋	3 x
	大 吉	大吉(セレベス)	3 x
	白茎赤芽	赤芽系3	3 x
	パンガミューロー	パンガミューロー(台湾)	3 x
	黒茎赤芽	黒茎赤芽(屋久島)	3 x
薑 芋	薑 芋	薑芋	2 x
檳榔芯	檳榔芯	檳榔芯(台湾)	2 x
	檳山芋	檳山群スマホフル社, 檳山群リキリキ社(台湾)	2 x
	紅檳榔芯	紅檳榔芯(台湾)	3 x
唐 芋	唐 芋	唐芋, 海老芋, 樋口, 猿芋, ぼどう芋, 麵芋, 高雄2号(台湾), 山形田芋の芽条変異, 吉浜芋の芽条変異	2 x
	真 芋	真芋	2 x
	真女芋	白茎海老芋, 吉浜芋, 山形田芋	2 x
	大 頭	白頭, 大頭	2 x
八 っ 頭	八 っ 頭	八っ頭	2 x
	白茎八っ頭	白茎八っ頭	2 x
みがしき	みがしき	みがしき	2 x
	ロフト蕃	ロフト蕃(台湾)	2 x
溝 芋	溝 芋		2 x
	赤 口		2 x
筍 芋	筍 芋	台湾芋	2 x
蓮 芋	蓮 芋	蓮芋	2 x

第4表 農書・本草書類に記載されているサトイモの品種と現存品種・品種群との比較判別

1. 唐芋		
資 料 名	資 料 中 の 品 種	現存品種群(品種)
会 津 農 書	唐芋	——
雍 州 府 志	唐ノ芋	——
会 津 農 書 附 録	とふ芋	——
百 姓 伝 記	とうのいも	唐芋
耕 稼 春 秋	唐ノ芋(唐の芋、赤すいき)	唐芋
大 和 本 草	唐芋(白芋)	蓮芋
和 漢 三 才 図 会	唐芋	唐芋
物 類 称 呼	唐芋(女芋)	唐芋
農 事 弁 略	とふの芋	——
成 形 図 説	タウノイモ 臺乃芋	——
粒 々 辛 苦 録	とう芋	蓮芋
山本家百姓一切有近道	唐の芋	——
北越新発田領農業年中行事	とう芋	唐芋
耕 作 仕 様 書	とうの芋	唐芋
草 木 図 説	タウノイモ(紫芋)	唐芋
2. 蓮芋		
百 姓 伝 記	蓮いも	——
農 業 全 書	はすいも しらいも 蓮芋(白芋)	蓮芋
本 朝 食 鑑	はすいも 蓮芋	蓮芋
大 和 本 草	蓮芋(栗芋)	蓮葉芋
和 漢 三 才 図 会	ハス 蓮芋	蓮芋
物 類 称 呼	はすいも 蓮芋(ハツがしら、 ^{くりいも} 栗芋)	——
成 形 図 説	ハスイモ タウノイモ ハスイモ 蓮芋(臺乃芋、白芋)	蓮芋
農 家 業 状 筆 録	蓮芋	蓮芋
北越新発田領農業年中行事	蓮いも	蓮芋
本 草 図 譜	はすいも	蓮芋
耕 作 仕 様 書	蓮芋〔5種類〕	蓮芋〔1種類〕
農業功者江御問下ケナケ條…	蓮芋	蓮芋
草 木 図 説	ハスイモ(白芋)	蓮芋
菜 園 温 古 録	蓮芋	——
3. 白芋		
会 津 農 書	白芋	——
会 津 農 書 附 録	しろいも(しれ芋)	蓮芋
筑 前 国 統 風 土 記	白芋	蓮芋
菜 譜	白芋(唐芋)	蓮芋
農 事 弁 略	白芋	——
私 家 農 業 談	白芋	——
本 草 綱 目 啓 蒙	白芋(ハスイモ、クリイモ)	蓮芋

3. 白芋 (続き)

資 料 名	資 料 中 の 品 種	現存品種群(品種)
本草図譜	白芋(しろいも, くりいも)	蓮芋
砂 島 菜 伝 記	白いも(はすいも, からいも)	蓮芋
農業功者江御問下ケ十ヶ條…	白芋	—
亀 尾 疇 圃 栄	白芋	—

4. 赤芋

農 業 全 書	赤いも(赤芋)	—
筑前国続風土記	赤芋	—
大 和 本 草	赤芋	—
菜 譜	赤芋	—
私家農業談	赤芋	—
成形図説	赤芋(赤いも, 紫芋)	—
砂 島 菜 伝 記	赤いも	—
農 要 録	赤芋	—
農業功者江御問下ケ十ヶ條…	赤芋	—
農業年中行事	赤芋	—

5. 栗芋

会 津 農 書 附 録	くりいも	—
百 姓 伝 記	くりいも	—
農 業 全 書	栗いも	—
本 朝 食 鑑	栗芋	蓮葉芋
筑前国続風土記	栗芋	蓮葉芋
菜 譜	くりいも(はす芋)	蓮葉芋
私家農業談	栗芋(蓮芋)	蓮葉芋
成形図説	栗芋〔2種類〕	蓮芋, 蓮葉芋
耕作仕様書	栗芋(小さいも, 股黒)	蓮葉芋

6. 青芋

本 朝 食 鑑	青芋	藪芋
筑前国続風土記	青芋	—
大 和 本 草	青芋	—
和 漢 三 才 図 会	青芋(藪芋, 2種類)	藪芋
菜 譜	青芋	—
私家農業談	青芋	—
本草綱目啓蒙	青芋(サトイモ, ハタケイモ, エグイモ, ハタイモ)	藪芋
農業談拾遺雑録	青芋	—
本草図譜	青芋(さといも, はたけいも, あおから)	藪芋

7. 真芋

資 料 名	資 料 中 の 品 種	現存品種群(品種)
清 良 記	真芋	——
耕 稼 春 秋	真芋	——
和 漢 三 才 図 会	真芋 ^{マイモ}	——
私 家 農 業 談	真芋(蔓ノ子芋)	——
本 草 綱 目 啓 蒙	真芋	——
成 形 図 説	真芋	——
山本家百姓一切有近道	まいも	——
草 木 図 説	マイモ	——

8. 数芋

会 津 農 書	エグ芋	数芋
会 津 農 書 附 録	ゑく芋(花咲)	数芋
百 姓 伝 記	ゑごいも	数芋
本 朝 食 鑑	数芋 ^{えぐいも}	数芋
本 草 図 譜	えくいも	数芋
耕 作 仕 様 書	いごいも(花いも)	数芋
草 木 図 説	エグイモ	数芋

9. 鶴の子

農 業 全 書	つるの子	——
筑 前 国 統 風 土 記	つるの子(大つる, 小つる)	——
大 和 本 草	ツルノコ(大小2品種)	——
菜 譜	つるの子(親抱き)	——
成 形 図 説	鶴児芋 ^{ツルノコイモ} (早芋 ^{ワザイモ})	——
砂 島 菜 伝 記	鶴ノ子	——

10. 黒芋

会 津 農 書	黒芋	——
筑 前 国 統 風 土 記	黒芋	——
大 和 本 草	黒芋	——
菜 譜	黒芋	——
私 家 農 業 談	黒芋	——
本 草 図 譜	くろいも(くろから)	——

11. 大芋

清 良 記	大芋	——
農 業 全 書	大いも	——
筑 前 国 統 風 土 記	大芋(ほら芋)	唐芋(大芋)
大 和 本 草	大芋(ホラ芋)	唐芋(大芋)
菜 譜	大芋(法螺芋 ^{ほら})	唐芋(大芋)
私 家 農 業 談	大芋	——

12. 里芋

資 料 名	資 料 中 の 品 種	現存品種群(品種)
耕 稼 春 秋	里芋	——
農 家 業 状 筆 録	里芋	——
砂 畠 菜 伝 記	里芋(鶴ノ子(親抱き))	——
農 要 録	里芋	——
農 業 年 中 行 事	里芋	——

13. 野芋

筑 前 国 統 風 土 記	野芋	——
大 和 本 草	野芋	——
菜 譜	野芋	——
本 草 綱 目 啓 蒙	野芋(クハズイモ, イシイモ, ドクイモ)	<i>Alocasia macrorrhiza</i> Schott
本 草 図 譜	野芋(いしいも, くはすいも, とくいも)	——

14. 紫芋

私 家 農 業 談	紫芋	——
本 草 綱 目 啓 蒙	紫芋(トウノイモ, ヲンナイモ, アカイモ, クロドウ, ボドウ)	唐芋
本 草 図 譜	紫芋(あかいも, とうのいも, あかから)	唐芋

15. 嶋芋

清 良 記	嶋芋	数芋
百 姓 伝 記	嶋いも	数芋
農 事 弁 略	嶋芋	——

16. 八つ頭

成 形 図 説	ヤツカシライモ, ヤツカチ 八頭芋(八口, 親せ賀美芋, 切芋, 赤鶴芋)	八つ頭
耕 作 仕 様 書	八つ頭いも	八つ頭
草 木 図 説	ヤツガシラ(九面芋)	八つ頭

17. 水芋

私 家 農 業 談	水芋	——
本 草 図 譜	水芋(ミついも, ミヤこいも, たけいも)	溝芋
草 木 図 説	水イモ	数芋

18. 霜芋

清 良 記	霜芋(露芋)	蓮芋
成 形 図 説	霜芋(島芋, 根芋, 菱芋, 芋卵)	数芋

19. その他の品種

清 良 記	八花芋	蓮芋
	はう子芋	——
	白唐芋	——
	黒唐芋	——
	つし芋	——
	柄白芋	——
	永芋	——
	丸芋	——

19. その他の品種 (続き)

資 料 名	資 料 中 の 品 種	現存品種群(品種)
清 良 記	実赤芋	八つ頭(芽赤)
会 津 農 書 附 録	大しんずい	—
	小しんずい	—
	小いも	—
百 姓 伝 記	十里いも	—
	青から	数芋
	はじかミいも	—
	つくミいも	—
和 漢 三 才 図 会	粒芋	黒軸
私 家 農 業 談	法螺芋	—
本 草 綱 目 啓 蒙	連禪芋(ホライモ)	唐芋(大芋)
成 形 図 説	ワサイモ 早芋	—
	ミガシキイモ 美賀志伎芋(野菜芋, ひき芋)	—
	ミヤツイモ 都 芋	—
	ツボイモ 穴芋	—
	オンドウイモ 音頭芋	唐芋(大芋)
	イシイモ イシイモ ドクイモ ハセヤイモ 海芋(石芋, 毒芋, 芭蕉芋, 野芋)	—
農 家 業 状 筆 録	からくろ	—
山本家百姓一切有近道	をやせいも	—
北越新発田領農業年中行事	から喰ひいも	—
本 草 図 譜	九面芋(やつかしら)	八つ頭
	ひやくくはう 百 果芋(くりいも)	蓮葉芋
砂 島 菜 伝 記	長崎いも(南京いも, 上座芋)	赤芽
耕 作 仕 様 書	わせ芋(夏芋)	—
	赤から芋	唐芋
	とたり(つるの子, はかいも)	—
草 木 図 説	オヤセタゲ	—
	エグナイ	—
	タケイモ(傀儡芋)	—
	ヤマトイモ(アイサ)	赤芽
菜 園 温 古 録	早芋	—

第3表のように、唐芋群には代表品種として‘唐芋’、‘真芋’、‘女芋’及び‘大頭’があり、それぞれの品種は、草丈、葉柄のアントシアン色素発現様相、親芋の大きさ、子芋の着生状態や数などについて、互に若干異なっている。しかし、この品種群に属する品種は、すべて2倍体(2n=28)で、葉柄頸部からその下部が他の品種群のものと比較して緩かに彎曲し、一見、柔軟な感じを与える。親芋は500g以上となり、子芋は頂部が球形で、基部が細く、その数は比較的少ない。親芋、子芋共に肉質は緻密柔軟、半粘性で、風味は極めて良好である。また、葉柄

は良質のずいきとして利用される。

「唐芋」が記載された15編の資料のうち7編の「唐芋」については、その特性の記述から唐芋群に属するものと判断した。しかし、『大和本草』には「唐芋」(「白芋」)について「莖〔葉柄〕長大ニシテ白シ、故ニ白芋ト云 畿内ニマレナリ 莖ハ煮テ食シ 生ニテ醋ヲ加ヘテ食シ 生ニテ皮ヲ去 煮テ乾テ茄トノ食ス 味ヨシ無毒 乾菜ノ上品ナリ 其根〔球根〕甚寒ヲソル」と述べられているので、この「唐芋」(「白芋」)を「蓮芋」と判断した。また、『粒々辛苦録』の「とう芋」については、補植できない特性が記されているので、「蓮芋」と判断した。『成形図説』では「蓮芋」を「薑乃芋」と記し、『菜譜』や『砂畠菜伝記』では、「蓮芋」と判別した「白芋」を一名「唐芋」、「からいも」と称している。また、佐賀県、長崎県、鹿児島県の一部では、現在、「蓮芋」を「トイモ」と呼んでいる。従って、『大和本草』の「唐芋」(「白芋」)を「蓮芋」と判断しても誤りではないように思われる。

『会津農書』の「唐芋」及び『会津農書附録』の「とふ芋」の解説(注)では、会津地方で現在、キクイモ *Helianthus tuberosus* L.を「唐芋」と呼んでいるので、これらの資料中の「唐芋」と「とふ芋」をキクイモと特定している。しかし、キクイモは、これらの資料が成立後、約170年を経た文久年間に初めてわが国へ導入されている⁴²⁾ことから、また、資料中の品種名の配列状態から「唐芋」と「とふ芋」はサトイモの一品種とみるべきであろう。

なお、「唐芋」という名称は、サトイモの品種「唐芋」あるいは唐芋群、あるいは「蓮芋」を表すだけではなく、『合志郡大津手永田畑諸作時候之考』、『耕耘録』、『農業功者江御問下ケ十ヶ條并ニ四組四人ヨリ御答書共ニ控』、『肥後国耕作聞書』、『農業年中行事』及び『広益国産考』ではサツマイモ *Ipomoea batatas* Poir.の総称名を「唐芋」あるいは「たういも」と記している。さらに、『産物帳』にはヤマノイモ *Dioscorea* spp.の総称名あるいは品種名として、陸奥国南部領で「といも」、陸奥国田村郡三春で「とういも」、能登国で「とうのいも」、美濃国で「とのいも」と記されている。

(2) 蓮芋

「蓮芋」は、いわゆるサトイモとは形態上も利用上も異なっている。『農業全書』は「蓮芋」について、「莖葉〔葉柄と葉身〕白き〔淡緑色で、葉の表面に蠟物質が多い〕ゆえ、白芋とも云なり、手入を能し、夏秋葉くき大きなりたるを、段々に取用ゆべし。莖の中すきとおりて、蓮のくきのごとくなるゆへ、蓮芋と云」と、その地上部の特徴を的確に述べている。

「蓮芋」の葉柄は生食してもほとんど藪味がなく、皮を剥いで棲物や酢物などに用いられるだけでなく、乾燥したずいきを煮食する。子芋は、サトイモとは異なり、親芋から直径3—5mmの地下茎が約40cm伸長し、その先端に生じる。この子芋は、直径3cm以下で、クリの実の形をしていて、生食しても藪味はないが、硬いので現在は食用にされない。花は、植付けたまま株を越冬させた場合、大株に7月頃咲くが、サトイモの花と比較して小さく、その仏炎苞は上部が白色である。

「蓮芋」について記述した資料には、その特性や栽培法、利用法が比較的に詳しく述べられているので、14編の資料のうち10編については、「蓮芋」を「蓮芋」と判断した。しかし、『大和本草』は「蓮芋」について、「其葉蓮ノ如ク圓シ 其根〔球根〕圓ニシテ栗ノ如ク 味モ亦クリニ似テ生ニテモ煮テモ食ス 味尤ヨシ 又栗芋トモ云 葉モ根モ常ノ芋ヨリ小也 毒ナシ」と述べている。この「蓮芋」は葉身がハスのように丸く、球根が生食でき、栗芋とも呼ばれることから「蓮葉芋」と判断された。また、『耕作仕様書』には「蓮芋」として5種類をあげ、それぞれの種類の特性が記されているが、これらのうち1種類を除いては「蓮芋」と判断することができなかった。

(3) 白芋

喜田¹⁷⁾及び下川³⁹⁾は、「白芋」について「蓮芋」と同じ特性を述べ、喜田はその葉柄が生食できることを、また、下川は「白芋」が「蓮芋」とも呼ばれることを記している。一方、第3表には蓮葉芋群と土垂群のそれぞれに「白芋」をあげ、石井¹⁴⁾は和歌山県産の「しろいも」(白芋)を子芋類のなかの青芋群に属する一品種としている。

「白芋」が記載された11編の資料のうち6編の「白芋」は、その特性の記述から「蓮芋」と判断されたが、特性の記述をほとんどあるいは全く欠く残りの6編の資料の「白芋」については判別することができなかった。なお、『農業功者江御問下ケ十ヶ條并ニ四組四人ヨリ御答書共ニ控』の「蓮芋」を「蓮芋」と判断したので、この資料の「白芋」は「蓮芋」とは異なり、第3表や石井¹⁴⁾があげている「白芋」ではないかと考えられる。

(4) 赤芋

「赤芋」は明治時代以降の文献には前田の報文²⁶⁾〔その材料の項には「赤芋」と記され、結果の項は「赤芽」(2 n = 28)となっている。誤植かどうか不明〕を除いてはみられない。

喜田¹⁷⁾はサトイモを莖芋、唐の芋、八つ頭芋、里芋、白芋、田芋に大別し、これらのなかの里芋類を青茎種と赤茎種に分け、さらに、この赤茎種に「紫芋」などと共に「赤芽芋」をあげてそれぞれの特性を述べている。また、下川³⁹⁾はサトイモを赤茎種と青茎種に分け、赤茎種の一品種として「赤芽芋」、「唐の芋」、「女芋」などをあげている。第3表では赤芽群と唐芋群が区別され、前者に属する品種として「赤芽」、「都芋」、「大吉」などがあげられている。

調査した資料や『産物帳』に「赤芽」という品種あるいは品種群が全く記載されていないので、明治時代以降になって初めて赤芽群が外国から導入されたか、あるいは、江戸時代の「赤芋(群)」を赤芽群や唐芋群などに分別整理したかのいずれかと考えられる。外国からの導入については、赤芽群のなかでは「大吉」のみが1935年にセレベスから導入された記録がある⁵²⁾にすぎない。佐賀県唐津市から長崎県平戸市一帯では、現在でも「赤芽」を「赤芋」と呼んで栽培している。これらのことを総合すると、赤芋(群)は分別整理されたと考えるのが妥当のように思われる。

赤芽群に属する品種は、3倍体(2 n = 42)で、草丈約130cm、やや開張性で粗剛にみえる。葉柄は赤紫色あるいは赤褐色で、その頸部は鉤形に屈曲している。親芋は球形で約300g以上となり、子芋は比較的に大きい、その数は少ない。親芋、子芋ともに表皮は赤味を帯び、黒褐色の茸毛で覆われ、肉質は半粘性、柔軟で、食味は優れている。また、葉柄は生のままでは数くて利用できないが、皮を剥いで乾燥すれば食用となる。このように赤芽群は詳細に検討すれば、前述の唐芋群と異なる点が多いが、利用部分やそれらの食味は互に類似している。

「赤芋」が記載されている10編の資料のうち7編にその特性が略記されているが、いずれの「赤芋」も現存品種との関係を明らかにすることができなかった。ただ、「赤芋」の特性を記述した資料には、『大和本草』を除いて、「唐芋」が記載されていないので「赤芋」と記されているもののなかに唐芋群に属する品種が含まれている可能性も考えられる。

『農業全書』は、「赤芋」について「茎〔葉柄〕あかく大きにして、ひたし物あへものなど、種々料理に用いて能ものあり」と述べている。この「能〔よき〕ものあり」は「赤芋」と呼んでいるもののなかには葉柄が料理に適した品種があると解されることから、『農業全書』の「赤芋」は一品種ではなく、品種群ではないかと考えられる。

『産物帳』には、「赤芋」あるいは「赤いも」をあげている国が10か国あり、そのうち「赤芋」と「唐芋」の両方を併記している国が4か国、「唐芋」の記載を欠く国が3か国、「赤芋」を別名「唐芋」と記した国が2か国(周防、長門)、「赤芋」の一品種として唐芋群に属すると推測

される「黒から」(「からくろ」)をあげている国が筑前国福岡領である。『筑前国続風土記』、『大和本草』及び『菜譜』は福岡藩の御用学者 貝原益軒の著書で、『農業全書』にも益軒が関与している⁴⁸⁾ことから、これら4編の資料の「赤芋」のなかには唐芋群に属する品種が含まれているのではないかと推測される。

越中で成立した『私家農業談』では「赤芋」を「上り〔収量〕少しといへとも、糸ぐからずして味よし、茎〔葉柄〕も赤ずいきといふて食によし」と述べている。この資料よりも約80年前に、越中に隣接する加賀で成立した『耕稼春秋』には「唐芋」を別名「赤ずいき」と記しているので、『私家農業談』の「赤芋」は唐芋群に属するものではないかと推測される。

なお、高柳⁴⁹⁾は『大和本草』の「赤芋」を、また、青葉²⁾及び高柳⁴⁹⁾は『成形図説』の「赤いも」を赤芋群に属するものとしている。

(5) 栗芋

第3表は、藪芋群の代表品種として「藪芋」をあげ、その同種異名あるいは類似品種の一つとして「栗芋」をあげている。また、門田ら¹⁵⁾の調査では「栗芋」は中生で、親芋の収量少なく、子芋の収量極めて多く、葉柄緑色で、乾燥したずいきは藪味が極めて少なく、甘味が多いという結果が得られている。この「栗芋」は第3表の藪芋群の「栗芋」ではないかと考えられる。

大和⁵²⁾は蓮葉芋群の「蓮葉芋」について、「味が栗の^{はすいも}ように美味しい、また萌芽が白いので、古く栗芋、白芋と名付けられた。しかし、葉柄専用の蓮芋も白芋と呼ばれたので混乱したこともある」と述べている。また、熊澤²³⁾は『重修本草綱目啓蒙』を参考として「蓮葉芋」について「古くは白芋またははすいも、一名くりいもといつて、芋は栗のごとく味よく生煮ともに食することができるとして高く認められた」と記している。『重修本草綱目啓蒙』は『本草綱目啓蒙』の本文中の脱字などを補って刊行されたもので⁴⁹⁾、その内容は本資料に用いた『本草綱目啓蒙』とほとんど同じであると考えられる。『本草綱目啓蒙』には「白芋ハハスイモ 一名クリイモ 葉形常芋ヨリ短ク 根〔芋〕モ形圓ニノ栗ノ如ク 味モ栗ノ如シ 生熟共ニ食フ 葉根共ニ常芋ヨリ小ナリ 其茎〔葉柄〕色白ク 味藪ナラス生食スベシ 一名銀芋 広東新語 茄蓮 群芳譜」と記されている。この「白芋」(「ハスイモ」,「クリイモ」)は芋も葉柄も生食できるので、前述のように「蓮芋」と判断した。なお、蓮葉芋群に属する品種の葉身は他の品種群のものよりも先端が丸味を帯び、葉柄は藪くて生食できない。

調査した9編の資料のうち、『本朝食鑑』、『筑前国続風土記』、『菜譜』及び『私家農業談』では、「栗芋」は芋を生食しても藪味がなく、クリの実のようであると述べ、『本朝食鑑』を除いて、葉が丸くハスの葉に似ていと述べている。従って、『本朝食鑑』を除いた3編の「栗芋」は「蓮葉芋」と判断された。『本朝食鑑』の「栗芋」については葉の特性が記述されていないので「蓮芋」とも考えられるが、前述のように、『本朝食鑑』では「蓮芋」については別に項を設けて記述されていて、この「蓮芋」を「蓮芋」と判断したので、「栗芋」を「蓮葉芋」と判断しても間違いではないように思われる。

『成形図説』では「栗芋」についての記述が2箇所で行なわれている。最初の箇所では「和訓栞東国ほうと云 食鑑云生食テ甘美 不藪如生栗及烏芋 図会に唐芋と出し 大和本草に蓮芋一名栗芋とあるものにて芋の上等也」とある。この記述中の『本朝食鑑』及び『大和本草』の「栗芋」は前述のように「蓮葉芋」と判断したが、『和漢三才図会』の「唐芋」は明らかに「唐芋」であり、この部分の記述は恐らく『成形図説』の著者の錯誤と考えられる。従って、この個所の「栗芋」は「蓮葉芋」と判断される。また、次の箇所では「栗芋^{クリイモ}てふ種〔子芋〕ハ生ながら食ふべし 京師近郊にハ隴區に水を引て蒔るもの殊に茎〔葉柄〕肥太し 四時ともに取用ふ」と述べている。この「栗芋」は「蓮芋」と判断される。

なお、青葉²⁾及び高柳⁴³⁾は『百姓伝記』の「栗芋」を、また、熊澤²³⁾及び高柳⁴³⁾は『本朝食鑑』の「栗芋」を蓮葉芋群に属するものとしている。

(6) 青芋

福羽⁹⁾及び喜田¹⁷⁾は「青芋」をサトイモの総称名とし、石井¹⁴⁾、下川³⁹⁾及び富樫⁴⁶⁾は品種群名として取扱っている。一方、門田ら¹⁵⁾は品種特性調査のなかで一品種としての「青芋」について調査を行っている。また、第3表では「藪芋」の同種異名あるいは類似品種として「青芋」があげられている。このように、「青芋」は、明治時代から大正時代にかけては総称名として取扱われ、その後、第二次大戦終了前後までは品種群名を指し、以後、今日まで一品種を示すようになっていく。

調査した9編の資料では、「青芋」の特性が記述されている6編のうち、4編の「青芋」が藪芋群あるいはその群に属する品種と判断された。

(7) 真芋

下川³⁹⁾は「真芋」が陸奥地方ではサトイモの総称名を指すことを記している。また、『産物帳』では越中で「まいも」を品種群名としている。一方、門田ら¹⁵⁾は、和歌山産の「真芋」；産出地不明の「真芋」及び「早生真芋」の特性を調査し、和歌山産の「真芋」は葉柄が赤紫色で、他の2品種と比較して総芋収量に対する親芋収量比が大きいことを報告している。第3表では、「早生真芋」、「中生真芋」及び「真芋」があげられ、前二者は土垂群に属し、後者は唐芋群の代表品種の一つとなっている。また、倉窪²⁴⁾及び三輪・倉窪³²⁾は「真芋」が28本の染色体を有する2倍体であることを報告している。従って、江戸時代から大正時代のある時期には「真芋」は総称名あるいは品種群名であったが、現存の「真芋」のなかには3倍体の土垂群に属するものと2倍体の唐芋群に属するものがある。

調査した8編の資料のうち、特性が記述されている4編の「真芋」について同定したが、現存の品種・品種群のいずれに相当するか判別できなかった。

『私家農業談』では「真芋」の特性を「越中にて蔓ノ子芋といふハ殊更味すくれてよし」と記し、『成形図説』では「山田には島芋を営るべし、真芋は美き故、猪鹿に掘咬の憂あり」と述べている。これらの「真芋」は食味が優れていたことがうかがわれる。また、『草木図説』の「マイモ」は、一般に栽培され、広く食用にされるサトイモで、早晚性や子芋着生数などが異なると述べられているので、数品種を含む名称であることが理解される。

なお、青葉²⁾、熊澤²³⁾及び高柳⁴³⁾は『成形図説』の「真芋」を唐芋群に属するものとし、また、高柳⁴³⁾は『重修本草綱目啓蒙』の「真芋」も唐芋群に属するものとしている。

(8) 藪芋

「ゑごいも」及び「いごいも」の「ゑご」と「いご」は「藪芋」の「えぐ」の訛と考え、これらを「藪芋」として取扱った。7編の資料のうち、特性が記述されている6編の「藪芋」は藪芋群に属するものと判断された。なお、『会津農書』は「エグ芋」について、その特性の記述を欠くが、他の資料に「藪芋」と記されている場合、藪芋群以外の群を指すことがなかったので、『会津農書』の「エグ芋」も藪芋群に属するものと判断した。

(9) 鶴の子

「鶴の子」を記載している6編の資料のうち『成形図説』を除いては、筑前国福岡領で成立した資料である。従って、「鶴の子」はこの地域特産の品種のように考えられる。しかし、『産物帳』によると加賀、伊豆、出雲など11か国で、「鶴の子」があげられているので、「鶴の子」は広い範囲に分布していたものと思われる。

下川³⁹⁾は「ツルノコ」を加賀地方でサトイモの総称名として用いていたと述べている。また、

『筑前国続風土記』と『大和本草』には「つるの子」に大・小の2品種が含まれ、前者が優良品種であると記されていることから、これらの資料の「つるの子」は品種群名を示すものと考えられる。石井¹⁴⁾は、藪芋類を子芋の形によって丸形と長形の2系統に分け、‘まるじまいも’(丸縞芋)と‘ながしまいも’(長縞芋)の2品種を代表品種としてあげ、福岡県の‘鶴の子’はこの類であると述べている。

一方、第3表には石川早生群と土垂群にそれぞれ‘鶴の子’があげられている。また、門田ら¹⁵⁾が調査した‘鶴の子’は、中早生で、葉柄が赤紫色を帯び、子芋の収量が親芋の約4倍であった。これらの「鶴の子」は明らかに品種として取扱われている。

資料に略記された「つるの子」の特性からは、それらが現存の品種・品種群のいずれに相当するか判別できなかった。

なお、青葉²⁾、熊澤²³⁾及び高柳⁴³⁾は、『大和本草』の「ツルノコ」及び『成形図説』の「^{ツルノコイモ}鶴児芋」を石川早生群と土垂群を一括した群に属するものとしている。

(10) 黒芋

「黒芋」はサトイモの品種分類を扱った明治時代以降の文献には見当たらない。ただ、下野⁴⁰⁾は、屋久島の小瀬田地区や尾之間地区で晩生品種として‘クロイモ’が栽培され、それは葉柄が赤黒く、葉身が濃緑色で、草丈が高く、芋の頂芽及び根が白いと述べている。

『本草図譜』の「くろいも」、別名、江戸の「くろから」は、葉柄が紫黒色で、子芋が多いなど、その特性の記述や図から、現存の黒軸群に属するものではないかと考えられるが、判別できなかった。また、残りの5編の資料の「黒芋」についても判別できなかった。

なお、青葉²⁾、熊澤²³⁾及び高柳⁴³⁾は、『大和本草』の「黒芋」及び『本草図譜』の「くろいも」(「くろから」)を黒軸群に属するものとしている。

(11) 大芋

『大和本草』は「大芋」について、「ホラ芋と云 ^{ホラガヒ}法螺ニ似タリ 山中ニウフ 其葉茎〔葉身と葉柄〕ノ形及茎ノ長キコトモ亦味モ赤芋ノ如シ 其根〔芋〕大ニシテ メクリ〔周囲〕尺餘アリ 微長シ 味良シ」と述べている。

「大芋」を記載している資料は越中、伊予、筑前で成立したものであり、『産物帳』では遠江、備前・備中岡山領、周防、筑前福岡領で「大芋」が記載されているので、「大芋」の分布範囲は比較的に広い。

しかしながら、明治時代以降のサトイモの品種分類について記された文献には「大芋」はみられない。しかし、坪井⁴⁷⁾は、「愛媛県西条市黒瀬ではオーイモと呼ぶ里芋で正月元日にデンガクをつくる。串にさして味噌をつけて焼いたものであるが、古くからこれを年神に供えている」と述べている。この「オーイモ」と伊予の農書『清良記』に「大上々の芋」と記されている「大芋」とは関係があるように思われる。

また、愛媛県大洲市には「親芋が長楕円形、1kg以上になる親芋用の品種」‘おうどう芋’が栽培され、それは「女芋〔唐芋群〕の系統といわれている」⁵³⁾。一方、第3表には唐芋群に‘女芋’や‘大頭’('おおど'と読む²⁷⁾)などがあげられている。大洲市の‘おうどう芋’は、この‘大頭’ではないかと推測されるし、『清良記』の「大芋」とも関係があるのではないかと考えられる。

『筑前国続風土記』には「大芋」は「上座〔かみつくら〕郡より出、甚大也。根〔茎〕の味よし。ほら芋と云。法螺貝に似たる故也。茎葉〔葉柄と葉身〕赤芋に似たり。茎も食す」と述べられている。上座郡は現在の福岡県朝倉郡である。この郡に隣接する嘉穂郡の山間部では‘オオイモ’と呼ばれる品種が栽培されている。また、朝倉郡に近い佐賀県鳥栖市河内では1940年頃まで焼畑で親芋を利用する‘ウーイモ’('ウー'は「オー」の転訛で、大きい意)あるいは‘オイモ’

と呼ばれる品種を栽培し、現在も一部の農家は自家用に平地の畑で栽培を続けている。『筑前国統風土記』の「大芋」は嘉穂郡の「オオイモ」や鳥栖市の「ウーイモ」あるいは「オイモ」と同一品種あるいは同一品種群に属するものではないかと推測される。

大洲市の「おうどう芋」と鳥栖市の「オイモ」は共に2倍体で、地上部、地下部とも互に似ていて、葉柄は頸部からその下約15cmまでは淡赤紫色、それより下は緑色で、葉身の形状は「唐芋」に似ている。親芋は楕円形、その重さは約1kg、子芋は約30gで基部は細長く、先端は球状で、その数は5-6個である。また、親芋の食味は半粘性で、やや淡白である。

前述のように、「大芋」は現存品種の分類について記された文献には見当たらないが、本報では、6編の資料中の3編の「大芋」を「大芋」品種とし、これらは唐芋群に属するものと判断した。

(12) 里芋

前述のように、「里芋」は、17世紀以来総称名として用いられているが、『耕稼春秋』その他4編の資料では、品種群として取扱われ、『本草綱目啓蒙』や『本草図譜』では、前述のように、一品種として取扱われている。

明治時代以降の文献には、「里芋」と呼ばれる品種はみられないが、特性が類似した品種を一括して里芋群とする考えは第二次大戦中まで続き、喜田¹⁷⁾や富樫⁴⁶⁾は「里芋」を総称名としたうえで数群に大別し、そのなかに里芋群を設け、この群に属する品種数は多く、それぞれの品種は主として子芋を食用にするものであると述べている。

「里芋」を品種群として取扱った5編の資料でも、それぞれによって、その群に属する品種は多少異なっているようである。『耕稼春秋』では「里芋」の他に「唐ノ芋」と「真芋」を、『砂島菜伝記』では「里芋」の他に「赤芋」と「白いも」（「はすいも」、「からいも」）をあげ、この「里芋」に「鶴ノ子」（「親抱き」）及び「長崎いも」（「南京いも」、「上座芋」）を含めている。

これら5編の資料の「里芋」は、喜田¹⁷⁾や富樫⁴⁶⁾の里芋群と同様に主として子芋用品種を含むものと考えられるが、現存のいずれの品種群に相当するか、判断することができなかった。

(13) 野芋

『筑前国統風土記』、『大和本草』及び『菜譜』の「野芋」に関する記述の内容はほぼ同じである。『大和本草』には「野芋ハ毒アリ食ヘカラス 根葉〔芋と葉〕常ノ芋ニ同 又 圃ニウヘテ三年不取モ毒アリ 野芋ニ同シ 又 河邊ニ生ノ 年久キアリ是亦有毒不可食」と述べられている。この記述によると、「野芋」は1種類でないことがわかる。すなわち、1) 芋や葉が栽培されているサトイモに似ていて毒をもっているもの、2) 畑に植えて3年間掘取らずに放置すると有毒となる。そのようなもの、3) 長年、河辺に自生しているもの、これら3種類を「野芋」と呼んでいる。

一方、『本草綱目啓蒙』の「野芋」は、一名クハズイモ、イシイモ、ドクイモと呼ばれ、サトイモとは別属のクワズイモ *Alocasia macrorrhiza* Schott を指している¹⁹⁾。また、『本草図譜』では、「野芋」について図ではサトイモが描かれ、その説明にはクワズイモを想像させる記述がなされ、後世になって山本亡芋¹⁸⁾が「野芋 茎青し、如此紫赤色ならず」と朱書している。

野生状態のサトイモはわが国の各地に現存し、そのなかには「数芋」と形態的に類似のものもある^{41) 44) 45)}。しかし、それらの渡来の時期や現存品種との類縁関係についてはまだ十分な解明がなされていない。

(14) 紫芋

明治時代以降の文献では、「紫芋」について喜田¹⁷⁾がサトイモの品種を6群に大別したうえで、第4群里芋のなかの赤茎種に入れ、下川³⁹⁾が「唐の芋」の別名としている。また、井上¹³⁾は昭

和の大嘗祭の献上物とするために上鳥羽で「紫芋」が栽培されたことを記している。しかしながら、第3表には「紫芋」はみられない。このことは、恐らく、「紫芋」が「唐芋」そのものあるいは唐芋群に属する品種と同一品種とみなされたからと考えられる。

本報では、『本草綱目啓蒙』の「紫芋」が「トウノイモ」、「ランナイモ」、「ボドウ」と呼ばれていたこと及びその特性の記述から、その「紫芋」を唐芋群に属するものと判断した。また、『本草図譜』の「紫芋」もその図及び説明から唐芋群に属するものと判断した。

(15) 嶋芋

野本³⁵⁾は、『エゴイモは、福井・石川の焼畑地帯では「ユグイモ」、南アルプス山麓では「シマイモ」と呼ばれた。シマイモは輪作のシマイに栽培するところから「シマイイモ」と呼ばれ、それが変化したものである』と述べている。また、第3表には「数芋」の同種異名または類似品種として「島芋」があげられている。

調査した3編の資料のうち、『清良記』及び『百姓伝記』の「嶋芋」は、その特性の記述から数芋群に属するものと判断した。

なお、『清良記』の「解説」では、「芋類の事」の項で、「嶋芋」の次に記されている「えと芋」を「えぐ芋」と特定している。しかし、『産物帳』にも「えといも」(越後国蒲原郡滝谷村)、「えといも」(長門国)、「江戸いも」(周防国)があげられ、これらはすべてヤマノイモの一品種と判断されること、また、本多¹²⁾の「江戸薯」についての解説から、『清良記』の「えと芋」はヤマノイモの一品種と考えるのが妥当のように思われる。

(16) 八頭芋

『成形図説』が「八頭芋」について「八口とも親せ賀美芋など云 子芋の魁の四旁に囲附て生る故の名なり、此もの魁^{オヤヒラ}扁く一頭に数芽^{イクラモメ}を生ず故に名とす 茎〔葉柄〕少紫^{アカ}く尾〔葉柄の先端〕細にして下に子芋支出なり」と述べているように、「八頭芋」は地上部、地下部ともに容易に他品種群のものと区別することができる。

3編の資料の「八頭芋」、「八ツ頭いも」、「ヤツガシラ」は八つ頭群に属するものと判断した。

(17) 水芋

水田で栽培されるサトイモには、沖縄や南西諸島の田芋及び「みがしき」^{40) 52)}、福岡県、佐賀県、長崎県などの「水芋」(「溝芋」)¹⁶⁾、八丈島の「大東芋」⁴³⁾、小笠原の「水芋」⁴³⁾及び山形県、秋田県などの「柄取芋」^{11) 43)}などがある。

『本草図譜』の「水芋」は、図及びその説明から福岡県、佐賀県、長崎県などの「水芋」¹⁶⁾(溝芋群)と判断した。また、『草木図説』の「水イモ」は、その特性の記述から数芋群に属するものと判断した。

(18) 霜芋

資料として用いた『清良記』には「芋類の事」の項に「霜芋」などサトイモの13品種をあげている。この資料の「解説」には「霜芋」は他の写本では「露芋」と記されていることが述べられている。また、『清良記』の他の部分には「露芋は、根〔芋〕は役不立、茎〔葉〕の多く出る物也」と記されている。この「露芋」について、三好³¹⁾は「ついも(はすいも、ついもは南予の方言)」と解説している。従って、『清良記』の「霜芋」(「露芋」)を「蓮芋」と判断した。

『成形図説』では「霜芋」について、「亦曰島芋 蓋〔けだし〕しもとしま音近し 又是を根芋あるハ蕒芋など称ふ也」と述べている。これらのことから『成形図説』の「霜芋」は数芋群に属するものと判断した。

(19) その他の品種

1) はう子芋、永芋及び丸芋

「はう子芋」については調査した資料のなかで、伊予の農書『清良記』にのみ記載されている。下川³⁹⁾は、サトイモの総称名の異名として「ホウコイモ」(伊豫地方)をあげている。『清良記』では「芋」あるいは「家芋」をサトイモの総称名とし(第1表)、「芋類の事」の項に「大上々の芋」として「はう子芋」や「大芋」など「十二品」をあげている。従って、「はう子芋」は、サトイモの総称名ではなく、品種名あるいは品種群名と考えられるが、現存の品種・品種群との関係は不明である。

『清良記』に記された「野芋」の「十二品」のなかにはヤマイモ、サツマイモ、コンニャク、サトイモの品種「嶋芋」など、種と品種を混同して記されているので、「大上々の芋」の「十二品」に、他の資料や『産物帳』にサトイモの品種・品種群として記載がない「永芋」や「丸芋」が含まれているが、これらがサトイモの品種・品種群かどうか疑わしい。

「永芋」については、武蔵国の農書『耕作仕様書』にナガイモの一品種として記載されている。この農書が成立した場所も時期も『清良記』とは異なっているので、「永芋」をナガイモの品種と速断することはできない。

2) 実赤芋

「実赤芋」に関する記述は『清良記』を除いては、調査した資料中にも、『産物帳』にも、また、明治時代以降の文献中にもみられない。ただ、下川³⁹⁾は「赤芽芋」を一名「芽赤芋」(伊豫地方)と記し、石井¹⁴⁾もほぼ同様に記述している。また、高知県出身の牧野は『増訂草木図説』のなかで、「メアカアリ 葉柄ヲ食用トシテ他ニ優ル 根茎ハ却テ之ヲ食ハズ」と述べている。

著者が知る限りでは、高知県では「み」音と「め」音の中間的な発音がなされる場合がある。従って、「実赤」から「芽赤」に、あるいはその逆に変化したのではないかと推測される。

この「芽赤」は現在高知県の一部で栽培されている。その外観は一見して「八つ頭」に似るが、「芽赤」は、「八つ頭」と比較して芋が小さく、離生した子芋の数が少なく、繁殖には塊状の芋を数個に切断し、それぞれを種芋とする。葉柄は全体が赤紫色を帯び、その葉柄の皮を剥ぐことなく煮食する。収穫する場合は株全体を掘取る。また、出荷の際には、芋の一部をつけ、葉身を取り除く。

『清良記』は「実赤芋」について、「大上々の芋」で、「根〔芋〕少くて茎〔葉柄〕を食する斗也」と述べている。このような特性は「芽赤」と一致し、『清良記』が成立した愛媛県北宇和郡三間町は高知県と地理的に近く、歴史的にも関係が深いので、『清良記』の「実赤芋」を「芽赤」と判断しても誤りではないように思われる。

なお、前述のように、下川³⁹⁾や石井¹⁴⁾は「芽赤芋」を「赤芽芋」と同一品種として取扱っているが、「芽赤」は2倍体で、地上部及び地下部の形態が「八つ頭」に類似しているため、八つ頭群に属するものと考えられる。

また、第3表には八つ頭群に属する品種として「八つ頭」及び「白茎八つ頭」の2品種だけがあげられているが、高知県の「芽赤」、熊本県阿蘇郡の「あかど」、宮崎県椎葉村一帯の「アカセンクチ」、センクチ及び屋久島の「ヤツクチ」はいずれも2倍体で、形態的にも「八つ頭」に類似しているため、これらは八つ頭群に属するものと考えられる。

3) はじかみいも、つくみいも及び九面芋(やつかしら)

吉川⁵⁴⁾は「ショウガは古くはクレノハジカミと呼ばれていて、それらが縮まってハジカミと呼ばれるようになった」と述べ、さらに『ハジカミは「端赤味」の略で、植物の芽が赤いことを意味する』と述べている。

『産物帳』にサトイモの一品種として「はじかみいも」を記載している国は尾張と紀伊で、こ

の「はじかみいも」と現存の品種・品種群との関係は不明である。

明治時代以降のサトイモの品種のなかに「はじかみいも」は見当らない。しかし、「はじかみいも」の「はじかみ」を「薑」に当て、「はじかみいも」を「薑芋」とすれば、第3表には「薑芋」があげられている。「薑芋」は、叢生で、球根が塊状に着生し、一見して「八つ頭」に似ている。しかし、「薑芋」は「八つ頭」と異なり、3倍体で、葉柄が淡緑色で、ずいきの質は悪く、球根の頂芽が赤紫色である。

『百姓伝記』には「はじかみいも・つくみいも子多くずいきも味よし」と述べられている。前述の「薑芋」は「子多くずいきも味よし」とは云えないので、「はじかみいも」は「薑芋」とは異なるようである。

「つくみいも」については他の資料や品種分類を扱った文献にもみられない。「つくみ」は、「かがむ」または「地にうづくまる」の意で、「つぐむ」あるいは鳥の「鶉」に由来していて、「つくみいも」は、恐らく、球根の着生状態に基づいて名付けられたものと推測されるが、現存の品種・品種群との関係は不明である。

『本草図譜』の「九面芋」(「やつかしら」)は、図及びその説明から八つ頭群に属するものと判断される。中国では、わが国の薑芋群と八つ頭群に相当する群に属する品種を合わせた一群を多頭芋類と呼び³⁶⁾、それに属する「九頭芋」(「九面芋」)及び「香蕉芋」は3倍体である⁵⁶⁾。従って、『本草図譜』の「九面芋」(「やつかしら」)が中国の「九頭芋」(「九面芋」)に相当するとすれば、八つ頭群よりもむしろ薑芋群に属すると判断するのが妥当かもしれない。しかし、『本草図譜』の「九面芋」は『本草綱目』の「集解」の品種名をわが国の「八つ頭」に当てたものである。

なお、青葉²⁾、熊澤²³⁾及び高柳⁴³⁾は『本草図譜』の「九面芋」(「やつかしら」)を八つ頭群に属するものとし、青葉³⁾は『百姓伝記』の「はじかみいも」と「つくみいも」について、「はじかみ(ショウガ)の名は芋の形から、つぐみの名は鳥の名から出たと考え、共に赤鷄芋の異名とした」と述べている。また、高柳⁴³⁾は『百姓伝記』の「はじかみいも」を赤芽群に属するものとしている。

4) 法螺芋、連禅芋、穴芋及び音頭芋

『筑前国続風土記』、『大和本草』及び『菜譜』には「大芋」を別名「法螺芋」と記している。一方、『私家農業談』では、サトイモの他の品種と共に「大芋」に次いで「法螺芋」が併記されているので、これらが互に異品種かあるいは同一品種か判別することができなかった。

『本草綱目啓蒙』では「連禅芋ハ紫芋ノ大ナル者ナリ、ホライモト呼ブ」と述べている。「大芋」を別名「法螺芋」と呼んでいる3編の資料の「大芋」については、前述のように、「大芋」品種とし、唐芋群に属するものと判断した。また、「紫芋」も唐芋群と判断した。従って、「連禅芋」を「大芋」と判断しても誤りではないように思われる。

「穴芋」について、『成形図説』は「植る時 圃 中を一 所づつ穴を掘 窪て母魁〔種芋〕を置故に名とす 大なるハ尺に餘れり」と述べている。『農業全書』は、サトイモの栽培法を6通り紹介したなかの一つに、「種る時分の事 三月麦の中に溝をさしはさみて ぐの目〔交互〕に穴をつき 一つ宛〔種芋を〕入て土をおほい……」と記している。同様な植付け法は『老農類語』、『私家農業談』、『山本家百姓一切有近道』などにも記されているので、「穴を掘 窪て母魁を置」法で植付ける品種は1品種とは限らないようである。このような方法で植付け、親芋の周囲が約30cmとなる品種を『成形図説』では「穴芋」と呼んでいるのではないかと考えられる。

第3表には「穴芋」はあげられていないが、下野⁴⁰⁾は、薩南諸島の各地で田芋とともに霜月祭や正月に使用される里芋(畑に栽培される品種)は「クロトー」の類で、これらをツボイモともいうと紹介し、白・黒(葉柄が淡緑色と赤黒色)の2種類があると述べている。薩南諸島でツボ

イモと呼ばれているものは1品種でないことがわかる。

「音頭芋」は第3表にはあげられていない。下野⁴⁰⁾は「〔大隅諸島の〕黒島は焼畑の島であり、畑にはまず里芋を栽培した。すなわち旧7、8月に新コバを伐って枯らしたらすぐ野菜をまき、そのあとに旧11—12月に、鋤で千鳥に穴を掘って子芋を差しこんで植えた。焼畑に植える里芋はオンドー芋であった。里芋は一般に奥山の深い木山跡がよく、……」と述べている。『成形図説』は「音頭芋」について、「魁芋」として図示すると共に、「魁極て巨なるハ尺五寸回に通て長さも是に称し皮薄く味も菲く子少し大隅種島に産るは甚大きく頭巨にて長し大和本草に法螺芋とて巨芋を出す大さ尺餘り微長し味赤芋の如しとあるも是ならん」と説明している。従って、『成形図説』の「音頭芋」は「黒島」の「オンドー芋」と判断される。また、『大和本草』が「法螺芋」について「根〔芋〕大ニシテメクリ〔周囲〕尺餘アル微長し、〔山中ニウフ〕と述べていることから、『成形図説』の「音頭芋」は「法螺芋」、つまり「大芋」と判断される。

5) 美賀志伎芋（野菜芋、ひき芋）

「美賀志伎芋」については、薩摩藩主 島津重豪の意によって編纂された『成形図説』以外には、調査した資料にも『産物帳』にも記載がない。明治時代以降では、熊澤²³⁾が「みがしき群」の品種として「みがしき」をあげ、鹿児島県に古くから葉柄用として栽培されていると述べている。また、下野⁴⁰⁾は、薩南諸島では与論島を除いた各島で「ミガシキ」が「ミガシキ」、「ニガシキ」、「水芋」、「イモガラ」、「ヤセイモ」（野菜芋の意）、「ヘイモ」（「ハーイモ」）（葉芋の意）、「ハタムジ」（「ミカシキ」）、「ニガセキ」などと呼ばれて栽培されていることを報告している。

『成形図説』には「美賀志伎芋」について、「俗言 野菜芋ぞ ひき芋なども呼子〔子芋〕なく根〔親芋〕より蔓のごと四方へ筋〔匍枝〕を延して其端より淡青茎〔シュート〕を生ず植るも其筋を畠に漫撒し上より踏糞堆の類を覆ひ垂ば 中夏の頃には既くも茎を引拔つ、糞料に判用て少も葎味なし」と述べている。鹿児島県農業試験場種子島支所から分譲された「みかしき」は、『成形図説』の説明のように、多くの匍枝を約20cm出し、その先端からシュートを生じた。従って、「美賀志伎芋」は「みがしき」と判断される。

「美賀志伎芋」あるいは「みがしき」は、わが国のサトイモとしては極めて特異な名称である。国分²⁰⁾は、水芋（水田あるいは水田の間の溝中を利用して栽培されるサトイモ）の中には葉柄、芋ともに食用にされるものがあるとし、屋久島、種子島、鹿児島などで先祖迎への精霊棚をミンノコタナまたはミズノコタナとよび、水芋の葉柄をきぎんで供えたと述べている。葉柄を主として利用する「みがしき」は別名「水いも」とも呼ばれ³⁸⁾、先祖祭の供物として用いられたことが想像される。精霊に「かしぐ」水いもに、接頭語の「御」をつけて「みかしき」あるいは「みがしき」という品種名となったものと推察される。

6) 都芋、長崎いも（南京いも、上座芋）及びからくろ

「都芋」について『成形図説』は「日向あたりにて称ふ 南京芋とも云り 東奥にて黒茎 遠江などにて女芋と呼べり」と記している。「都芋」やこの記述のなかの「南京芋」、「黒茎」及び「女芋」については以下の資料や文献に記載があり、一部については既に同定したものもある。『本草図譜』は「水芋」を紀州では「ミヤこいも」と呼ぶと記している。この「ミヤこいも」つまり「水芋」については、前述のように、第3表の溝芋群に属するものと判断した。

「南京芋」については『砂島菜伝記』に「長崎いもと云て、是ハ南京いも共云。此辺にてハ上座芋とも云て至て風味よく親〔親芋〕迄も味能いも也。是ハ子付方〔子芋の数〕ハ少、根入〔芋の成熟〕遅し。冬春にならされハ掘取かたし。尤右はから〔葉柄〕を取て至てよし。割て干か皮を去りて干せハ猶更よろし」と述べられている。この『砂島菜伝記』は筑前国福岡領で成立

したものであり、「南京いも」つまり「長崎いも」が、当時(1831年頃)、上座郡(現 福岡県朝倉郡)で特にさかんに栽培されていて、この地名に因んで「上座芋」と名付けられたものと考えられる。現在でも、この地域及びこの地域に隣接する福岡県小郡市や佐賀県鳥栖市では「長崎芋」という名で「赤芽」が栽培され、芋だけでなく、葉柄もその皮を剥ぎ、乾燥して食用にされ、さらに親芋は芽芋栽培にも利用されている。従って、『砂畠菜伝記』の「長崎いも」つまり「南京いも」は、その特性の記述とも考え合わせると、「赤芽」と判断しても誤りではないように思われる。

「黒茎」は『本草図譜』にも「くろいも」の別名「くろから」と記されている。また、同一文字ではないが、「唐」を「から」と読むならば、『清良記』に「黒唐」があげられている。『産物帳』には「黒がら」あるいは「くろから」として遠江国懸河領、美濃国及び尾張国で記録されている。これらは葉柄が紫黒色を呈していることが想像されるが、現存の品種・品種群のいずれに相当するか判別できない。

「女芋」については『物類称呼』に「唐芋たういもを遠州にて女芋と云」と記されている。また、『本草綱目啓蒙』は「紫芋ハトウノイモ 一名ヲンナイモ遠州 アカイモ筑前 クロドウ豫州 ボドウ防州」と記している。この「紫芋」つまり一名「ヲンナイモ」は前述のように唐芋群に属するものと判断した。また、第3表には現存の「女芋」が唐芋群にあげられている。

しかしながら、特性の記述を欠く『成形図説』の「都芋」はいずれの品種群に属するものか判別することができない。なお、第3表には現存の「都芋」が赤芽群に、また、「上座芋」が土垂群にあげられている。

「からくろ」については、伊予の農書『農家業状筆録』に植付け時期だけが略述されている。『産物帳』には尾張国と伊豫国越智島で記録されていて、壱岐国と筑前国福岡領ではそれぞれ「黒から」(からくろ)、「幹黒芋」(房郎)と記されている。明治時代以降の文献には「からくろ」は見当らない。ただ、以上の「からくろ」と同一品種かどうか不明であるが、佐賀県七山村の山間では「からくろ」が古くから水田で栽培され、その葉柄を塩漬けにして「からくろ漬」として賞味されている。この品種は2倍体で、地上部、地下部ともに「唐芋」に酷似している。

7) 柄白芋, 白唐芋, 黒唐及びから喰ひいも

青葉^{アヲ}は、山形県庄内地方特産の葉柄用品種「カラトリイモ」(「山形田芋」)について、カラトリの漢字として柄取, 唐取, 殻取, あるいは茎取が当てられると述べている。また、『成形図説』にはサトイモの葉柄が芋幹イモカラと記されている。サトイモの一部分を表わす漢字として「柄」, 「殻」, 「茎」, 「幹」が用いられた場合には、大凡、葉柄を指していることが想像される。しかし、「唐」については、「とう」あるいは「から」と読み、中国の古い国名・唐, 中国, あるいは外国を意味すると考えるのが普通で、サトイモの一部分を想像することは困難である。

『清良記』のサトイモの品種名「柄白芋」, 「白唐芋」及び「黒唐」をどう読むかは、これらの品種と現存の品種・品種群との関係を明らかにする上で重要である。「柄白芋」は「からしろいも」とだけ読むのが普通で、「白唐芋」は「はくからいも」, 「はくとういも」, 「しろからいも」, あるいは「しろとういも」, 「黒唐」は「こくから」, 「こくとう」, 「くろから」, あるいは「くろとう」のそれぞれ4通に読める。

「からしろいも」は『産物帳』に「白から」(「からしろ」)として美濃国であげられているだけで、他の資料や明治時代以降の文献には見当らない。また、「はくからいも」, 「はくとういも」, 「こくから」, 「こくとう」も資料や文献にはない。

「しろからいも」は、「白から」, 「白がら」, あるいは「しろから」として『産物帳』の伊豆国, 遠江国懸河領, 尾張国及び前述の美濃国であげられていて、「蓮芋」のように葉柄が淡緑色の

種類が考えられるが、現存の品種・品種群との関係は不明である。

「しろとういも」は『産物帳』の肥後国熊本領の「白とう」、第3表の唐芋群の「白頭」（しろどと読む。「大頭」と同種異名²⁷⁾）及び下野⁴⁰⁾の種子島の「シロトー」や屋久島・トカラ列島の「シロドー」が読みが似ている。「白頭」は熊本県阿蘇郡や大分県日田郡の山間地で、葉柄や親芋を食用とするために栽培されていて、親芋は愛媛県大洲市の「おうどう芋」のように大きく、葉柄は淡緑色である。「シロトー」や「シロドー」について下野⁴⁰⁾は、「シロツボ」、「シロイモ」とも呼ばれ、トカラ列島の中之島ではかつて焼畑で栽培されたと述べている。「白頭」と「シロトー」、「シロドー」は比較的に近い地域で、しかも山間地と焼畑で栽培されていることから同一品種あるいは類似品種とも考えられるが、「シロトー」あるいは「シロドー」の特性について記述されていないので、これら相互の類縁関係は不明である。また、『清良記』の「白唐芋」との関係も不明である。なお、青葉³⁾は『清良記』の「白唐芋」を「唐の芋」と推定している。

「くろから」については既に述べた通りである。

「くろとう」については、前述のように、唐芋群に属すると判断した「紫芋」が伊予では「クロドウ」と呼ばれていることが『本草綱目啓蒙』に記載されている。従って、『清良記』の「黒唐」は「クロドウ」と読むのが正しいようで、唐芋群に属するものと推測される。

下野⁴⁰⁾は、種子島の品種「クロトー」は「クロゲ」⁴¹⁾とも呼ばれ、晩生で、葉柄が赤黒く、葉身は濃緑色で、草丈が高く、葉柄や芽が赤黒いところから黒い「トー」というのであろうと述べている。つまり、「クロトー」の「トー」は葉柄や芋の頂芽を意味し、恐らく『成形図説』の「臺乃芋」の「臺」がこれに当る漢字と想定されているのではないかと考えられる。言葉の上での「唐」や「頭」はサトイモでは「臺」を意味する場合もあると考えてもよいように思われる。

なお、「ど」、「とう」あるいは「どう」が用いられている品種名としては「唐芋」、「臺乃芋」、「大頭」、「白頭」、「白唐芋」、「黒唐」、「ほうど芋」の他に、『産物帳』には豊後国熊本領と肥後国熊本領でそれぞれ「赤どう」と「赤とう」があげられている。また、第3表には見られないが、「あかど」と呼ばれる品種が熊本県阿蘇郡の山間部で栽培され、主として葉柄が漬物として利用されている。これは2倍体で、「八つ頭」のように叢生し、葉柄は赤紫色で、その長さは「八つ頭」よりもやや長く、球根は塊状となる。草姿などの特性が「八つ頭」によく似ているので、八つ頭群に属するものと判断される。

『本草綱目啓蒙』の「紫芋」の異名である防州の「ボドウ」は珍奇な名前である。この名前は他の資料にはみられないが、『産物帳』には品種名としてではなく、「赤芋」の異名である「唐芋」の葉柄を指すことが周防国と長門国で記されている。坪井⁴⁷⁾はポーリュウ（またはポーリ）という言葉が、中国地方の一部などではサトイモの総称として用いられ、紀州では正月の供物のサトイモを指し、岡山県新見市では祭礼にサトイモ料理を作る役の最長老の男性を、さらにはサトイモ料理そのものを表わすことを紹介し、検討を加えなければならないと断りながら、ポーリュウとは「祝り」というサトイモの祭りそのものを表現する語であったものが、以上のように多様化して使用されるようになったものと思われると述べている。このポーリュウ（またはポーリ）と「ボドウ」とは何らかの関係があるように思われる。

国分²⁰⁾は「ボドー」とよばれるサトイモが北九州で水田に栽培されていて、葉柄と芋を食用にしていると述べている。長崎県平戸市にも「ボドーウ」という親芋用の品種が栽培されている。これは前に述べた愛媛県大洲市の「おうどう芋」や佐賀県鳥栖市の「ウーイモ」あるいは「オイモ」、熊本県阿蘇郡・大分県日田郡の「白頭」に地上部・地下部の形態がよく似た2倍体である。

「から喰ひいも」については『北越新発田領農業年中行事』にのみあげられていて、「とう芋、蓮いも、から喰ひいも、植付 前〔里芋〕ニ同じ」、「から喰、芋・茎を賞候、取納里芋ニ同じ」

と記されている。この農書成立の地が山形県に近く、葉柄を食べることから出た品種名であるので、「から喰ひいも」は「山形田芋」ではないかと推測されるが、詳細は不明である。

8) 青から及び赤から芋

『百姓伝記』には、前述のように数芋群に属すると判断した「嶋いも」や「ゑごいも」と共に「青から」をあげ、「子多く、味よからず。ずいきも悪し」と述べている。『本草図譜』の「青芋」(「さといも」、「はたけいも」、「あをから」)は、前述のように、数芋群に属するものと判断した。従って、『百姓伝記』の「青から」は、その特性の記述も合わせて考えると、数芋群に属するものと判断される。

『耕作仕様書』は「赤から芋」の特性について「風味吉。芽の有ハくさる事なし。から〔葉柄〕薄赤ニて黒ミ有。とうのいもニ類す。身にしまり有、かたし。早に強し。堅地に悪し」と述べている。また、『本草図譜』では図題として「紫芋 あかいも大和本草 とうのいも同上 あから江戸」をあげている。江戸では「紫芋」を「あから」と呼んでいたことがうかがわれる。『本草図譜』は1844年に江戸で完成し、『耕作仕様書』は1839—1842年に武蔵国で成立している。このように、これら2資料がほぼ同年代、同地域で成立していることも考慮すると『耕作仕様書』の「赤から芋」と『本草図譜』の「紫芋」つまり江戸の「あから」は同一品種と考えられる。『耕作仕様書』には「赤から芋」は「とうのいもニ類す」と記され、この「とうのいも」は、前述のように唐芋群に属するものと判断した。また、『本草図譜』の「紫芋」も唐芋群と判断した。従って、『耕作仕様書』の「赤から芋」も唐芋群に属するものと考えられる。

9) 海芋及び八花芋

サトイモの品種名には、その地上部や地下部の特徴を示す言葉が含まれる場合が比較的に多い。しかし、花を表わす品種名は極めて少なく、資料のなかでは『会津農書附録』の「ゑく芋」(「花咲」)、『耕作仕様書』の「いごいも」(「花いも」)及び『清良記』の「八花芋」だけである。また、『産物帳』では下野国河内郡宇都宮領高谷林新田村で「花さきいも」が、同郡牛田村最寄十三ヶ村で「ゑくりいも」(「花さき」)があげられている。

数芋群に属する品種は、わが国のサトイモのなかで最も開花しやすく²²⁾²⁹⁾、他の品種群の花と比較して花茎が長く、花粉放出期には抱合していた仏炎苞黄色部の基部が全開するので目立ち易い。従って、数芋群に属する品種の一部が「花いも」あるいは「花さき」などの名称で呼ばれるようになったものと考えられる。

サトイモの開花について記した農書としては『農事遺書』、『農事弁略』、『耕作仕様書』及び『農業自得』がある。『耕作仕様書』を除いては、特定の品種名をあげずに開花について記述しているが、その記述の内容から『農事遺書』及び『農業自得』のサトイモは数芋群に属するものと考えられる。また、『農事弁略』のサトイモは「畑六畝の所にて只一つ花を見たり」と述べているように、極めて開花し難い品種で、数芋群に属するものではないようである。

本草書類では、わが国で初めてサトイモの花を図示した『成形図説』の他に、『本朝食鑑』、『和漢三才図会』、『本草図譜』及び『草木図説』がある。『成形図説』では図題に「海芋」とあり、開花した株が描かれているが、この花についての説明はなされていない。しかし、本文中には一般的に「芋ノ花は色黄く^{ツキ}旁に捲葉の如き長き萼ありて之を護めり 凡ソ芋魁^{ツツイ}の一ツものを三年^{ツツイ}続て栽れば花開ても根ハ腐り^{ウウ}訖る」と述べている。『海芋』の花の図は、仏炎苞黄色部の抱合部の開き具合や肉穂花序の長さから判断すると、数芋群に属する品種の花に似ている。

『草木図譜』は「エグイモ」及び「ハスイモ」の花を図示すると共に、これらの特徴を述べ、「ハスイモ」については「時ニ亦花アリ形同ジ、余先ニソノ花アルヲ得、一根六茎ヲ出シ六花ヲ併べ開ケリ、不知此種ノ常態ナリヤ」と記している。‘蓮芋’以外の品種でも1株から数花を抽

出して開花するが、それぞれの花は数日間隔で開花し、1花のなかで最も目立つ仏炎苞の黄色部は雄花序から花粉を放出した2日後には萎凋する³⁰⁾。従って、‘蓮芋’のように1株の花が並んで同時に咲いているようには見えない。同じ形の花が1株に6花並んで同時に咲いているように見える‘蓮芋’を他の品種と区別して「八花芋」と呼んでも不思議ではないように思われる。

資料として用いた『清良記』の原文には「八花芋」に振仮名は付けられていないが、訳文には「八花芋」と振仮名が付けられている。しかし、その理由を示す訳注はない。『清良記』の「霜芋」(「露芋」)は前述のように‘蓮芋’である。蓮芋群は第3表にみられるように1群1品種で、他に類似品種はない。「大上々の芋」としてあげられた「十二品」のなかに、‘蓮芋’に相当する品種名として2種類、つまり「八花芋」と「霜芋」(「露芋」)が記載されているのは、一般的には矛盾しているように思われる。ただ、前述のように、‘蓮芋’はすべての株が開花するとは限らない。通常、植付けたまま掘上げずに年を越した大株に開花することがある。開花した株あるいは1個所に数年間植付けたままの栽培を行っている‘蓮芋’を「八花芋」と呼び、不開花の株あるいは子芋を掘上げて貯蔵し、春に植え付けて栽培を行っている‘蓮芋’を「霜芋」(「露芋」)として区別したとも考えられる。

10) 粒芋及びヤマトイモ (アイサ)

「粒芋」について『和漢三才図会』は葉柄に紫色の條斑があり、子芋は小さくて丸く、味がよいと記している。また、『成形図説』は『和漢三才図会』で「粒芋」と呼んでいるのは俗に云う「団子芋」に類するものであると述べている。他の資料や『産物帳』には「粒芋」は見当たらないが、‘団子芋’については喜田¹⁷⁾、下川³⁹⁾及び富樫⁴⁶⁾が青芋類あるいは青茎類に属する品種とし、その特性について下川³⁹⁾は東京都下で栽培されていて、葉身が緑色で大きく、葉柄は直立して太くて長く、淡緑色であるが頸部と基部が淡紫色で、親芋の大きさと数は中程度で、子芋は小さくて数が多く、肉質は白色緻密で味がよいが、収量は少ないと述べている。『和漢三才図会』と『成形図説』の「粒芋」の記述及び下川の‘団子芋’の解説を総合すると「粒芋」は黒軸群に属するものと判断される。なお、第3表には‘団子芋’は数芋群にあげられている。また、熊澤²³⁾及び高柳⁴³⁾は『和漢三才図会』の「粒芋」を黒軸群に属するものとしている。

「ヤマトイモ」(「アイサ」)について『草木図説』は、葉柄基部が淡紫色を帯びているが「トウノイモ」のように紫色ではなく、親芋は極めて大きく、その表面は帯紅色で、肉質が硬く美味であると述べている。この特性の記述から「ヤマトイモ」(「アイサ」)は赤芽群に属するものと判断される。他の資料や『産物帳』には「ヤマトイモ」(「アイサ」)の記載はないが、門田¹⁵⁾は‘大和芋’について、親芋収量比が16.5%と記している。この‘大和芋’は子芋用と判断される。第3表では‘大和’は土垂群にあげられている。

11) つし芋、十里いも、とたり (つるの子、はかいも) 及びエグナイ

『清良記』は「つし芋」について「種子〔種芋〕を九月に取て 糠〔粃殻〕に入合、俵にしてつし〔(訳者注)：厨子。農家などで、天井や屋根の下に丸木や大竹をわたし、すのこを張ってむしろを敷き、二階のように作った物置場〕に上置といへり」と述べている。「大上々の芋」のなかの「つし芋」については、前述の「実赤芋」や「霜芋」(「露芋」)と共に、特に貯蔵法が詳細に述べられているので、貯蔵性が低い種類であることがうかがわれるが、他の資料や文献に全く記載されていないので、現存の品種・品種群との関係は不明である。

『百姓伝記』の「十里いも」は、「とうのいも」、「蓮いも」、「くりいも」と共に、「子〔子芋〕少なく、頭〔親芋〕大きにして、ずいきまで味よし」と述べられているので、葉柄も利用される親芋用品種あるいは親子兼用品種で、唐芋群、赤芽群あるいは八つ頭群のいずれかに属するものと考えられる。しかし、他の資料や文献に全く記載されていないので、現存の品種・品

種群との関係は不明である。なお、青葉²⁾は「十里いも」を、?を付けて唐芋群に属するものとしている。

「とたり」(「つるの子」,「はかいも」)について『耕作仕様書』は、「同じ芋也〔同じ種類のサトイモである〕。風味下。芽髓成れハ〔種芋に健全な芽が着いていれば〕くさる事なし。和らか成る地に植れハ大イニそたち、石取〔収量〕甚多し。早ニ痛む。から青く白し、用立ず〔葉柄は淡緑色で、食用に適さない〕」と述べている。「とたり」の意味は不明である。「はかいも」は「ばかいも」と読むのであろう。葉柄が淡緑色で、食用に不適な品種であるので、「とたり」は蓮葉芋、石川早生、土垂の品種群のいずれかに属すると考えられるが、判別することはできない。なお、現存の「鶴の子」については、前述のように、石川早生群と土垂群にあげられている。

「エグナイ」は極めて卒直な、特性を表す名前で、『草木図説』には「莖味差少シ、以上〔マイモ、オヤセタゲ、エグイモ、エグナイは〕ミナ青芋ニシテ茎青く葉形略同ジ」と述べられている。滋味が比較的少なく、葉柄が緑色の品種群としては蓮葉芋、石川早生、土垂の3群が考えられるが、判別することはできない。

12) 百果芋(くりいも)及びタケイモ(傀儡芋)

「百果芋」についての記載は『本草図譜』と『成形図説』を除いて、調査した他の資料や『産物帳』にはなく、明治時代以降のサトイモの品種分類を扱った文献にもみられない。

『本草図譜』は「百果芋」(「くりいも」)を図示すると共に、その特性について「形状〔草姿〕青芋に似て茎〔葉柄〕の半より下根〔芋〕の上に至りて紫黒色を帯ぶ 葉〔葉身〕は青芋に似て円し 根の子〔子芋〕離れずして委く母〔親芋〕に付き生ず 形栗の実の〔(に)の誤り〕似たり 莖味さしたるなきゆへ生にて醋に漬食す 熟すれば尤も甘味なり」と述べている。これらの特性の記述及び図から、『本草図譜』の「百果芋」(「くりいも」)は蓮葉芋群に属すると判断される。

一方、『成形図説』は「八頭芋」の説明のなかで『廣志』の「百果芋ハ魁大ニ子繁シ 畝コトニ収百斛」を引用し、「百果芋」は「切芋〔前述のように八つ頭群と判別〕の種〔種類〕なるべし」と述べている。従って、『成形図説』の「百果芋」は八つ頭群に属するので、『本草図譜』の「百果芋」(「くりいも」)とは異なるものである。

「タケイモ」(「傀儡芋」)について、『草木図説』は「葉形前種〔エグイモ〕ニ同ウシテ根結塊〔芋〕多カラズ、ソノ子〔子芋〕ヲ出スヤ地面ニ横延シ、太サ拇指ノ如ク長七八寸或ハ尺餘ニ至ル、味淡ニシテ美ナラザレドモ可食」と述べている。『本草図譜』には「水芋」の別名として尾州の「たけいも」をあげている。この「水芋」つまり尾州の「たけいも」は前述のように溝芋群に属するものと判断した。また、『本草図譜』には、「野芋 いしいも越後 くはすいも土佐 とくいも越後」の「一種」として「上州 下総等の河の中或泥池の中に生ず 葉の形青芋に似て 根〔匍枝〕白く竹の如く 末〔その先端〕に芽を出し 細長の塊りをなす これまたとくいもの類にして味ひ甚く酸く 毒あり 食へられず」と述べられ、「一種」と記された下に、後世、朱で加筆された一文「タケイモ毒なし食ふべし」がある。加筆者は図を見て「タケイモ」と判断したものと考えられる。『草木図説』の「タケイモ」は『本草図譜』の「野芋」の一種(タケイモ)で、高柳⁴³⁾が記載している「小笠原水芋」に近縁なものではないかと推測されるが、詳細は不明である。

13) オヤセタゲ及びをやせいも

サトイモの品種名に「おや」がつくものとしては、『山本家百姓一切有近道』の「をやせいも」、『成形図説』の「親せ賀美芋」(「八頭芋」,「八口」,「切芋」,「赤鶴芋」),『砂島菜伝記』の「親抱き」(「鶴ノ子」)及び『草木図説』の「オヤセタゲ」がある。また、『産物帳』では美濃

国で「おやせつき」があげられている。明治時代以降の文献では門田ら¹⁵⁾が広島産及び岐阜産の「親攻」をあげ、第3表には石川早生群と土垂群にそれぞれ「親責」が記されている。

「親せ賀美芋」の「せがむ」、「オヤセタゲ」の「せたぐ」、「おやせつき」の「せつく」あるいは「親攻」や「親責」の「せめる」はいずれも「せめたてる」を意味する言葉である。「おや」は「親」つまり「親芋」で、「親芋をせめたてる」品種、すなわち、子芋の着生が多く、それらの子芋によって親芋がせめたてられるように小さい品種と考えられ、それらの品種としては、通常、八つ頭群、薑芋群及び子芋用の品種群が当ると考えられる。しかし、『成形図説』の「親せ賀美芋」を除いては、これらの品種と現存品種・品種群との関係は不明である。

また、『砂畠菜伝記』の「親抱き」も親芋を取り囲むように多くの子芋が着生する品種であることが想像される。『山本家百姓一切有近道』の「をやせいも」は「をやせめいも」あるいは「をややせいも」の「め」や「や」が脱落したか、それらが詰ったか、あるいは「をや」とは関係がない別の意味をもつ方言ではないかと考えられるが、詳細は不明で、現存品種・品種群との関係を明らかにすることはできない。

14) 大しんずい、小しんずい及び小いも

『会津農書』にはサトイモの品種として「白芋」、「黒芋」、「エグ芋」及び「唐芋」があげられているが、それらの特性の記述はない。一方、『会津農書附録』は「関東にて作る芋の名」として品種名をあげ、それぞれについて簡単な説明を加えている。「大しんずい」は会津で専ら栽培され、「小しんずい」は「大しんずい」に似ていて、芋が丸くて収量が少なく、「小いも」は葉柄が短く、その色が「とふ芋」に似ていると述べられている。また、「くりいも」の説明のなかに葉柄が「しんずい」に似ているとある。『産物帳』には下野国河内郡岡本村最寄十一ヶ村で「しろいも」（「しんずい」）と記されているが、その他の国ではあげられていない。明治時代以降の文献にも「しんずい」はみられず、現存品種・品種群との関係は不明である。

「小いも」は『会津農書附録』の他に『耕作仕様書』にあげられている。『耕作仕様書』には「栗芋 小いも 股黒 同し芋也。風味中。形栗に似たる子沢山有。植てくさりなし。堅地に出来る。から青く白し。葉のきわ少赤みあり。用立ず。早によわし」と述べられていて、この「栗芋」（「小いも」、「股黒」）は、前述のように、蓮葉芋群に属するものと判断した。

『産物帳』では越中国、駿河国御厨村々、伊豆国、出雲国及び備前・備中岡山領で「小いも」あるいは「こいも」が記載されている。一般に、『産物帳』では各作物の品種名をあげるに止まり、それらの特性の記述を欠く場合が多いが、越中国では「こいも」について葉身は緑色で丸くて広く、葉柄は黒赤色で、芋は丸くて長いと述べられている。この越中国の「こいも」と『耕作仕様書』の「小いも」とは葉柄の色や芋の形が異なり、互に別の品種と考えられる。

『会津農書附録』の「とふ芋」と現存の品種・品種群との関係が明らかにされれば、越中国の「こいも」との異同を知ることができ、『会津農書附録』の「小いも」が現存品種・品種群のいずれに相当するかも明らかになるかもしれない。なお、「小いも」は明治時代以降の文献には全く記載されていない。

15) 早芋及びわせ芋

「早芋」は『成形図説』では「ワサイモ」と振仮名が付けられ、1866年に常陸国で成立した『菜園温古録』では振仮名がない。この『菜園温古録』よりも130年前に記された『産物帳』には常陸国水戸領で「早イモ」があげられている。また、1839—1842年に武蔵国で成立した『耕作仕様書』には「わせ芋」または「夏芋」と記されている。

明治時代以降の文献には「早芋」や「早いも」の記載はないが、「早生芋」については石井¹⁴⁾、喜田¹⁷⁾、下川³⁹⁾及び富樫⁴⁰⁾が、東京とその周辺で多く栽培され、草丈が低く、親芋が小さく、子

第5表 農書・本草書類に記載されているサトイモの品種と現存品種群との関係

資 料 名	資 料 成 立		現 存 品 種 群				
	年 代	地 域	薺 芋	蓮 葉 芋	黒 軸	赤 芽	唐 芋
清 良 記	1629—1654	伊 予	嶋芋				
会 津 農 書	1684	会 津	エグ芋				
薩 州 府 志	1684	山 城					
会 津 農 書 附 録	1684—1709	会 津	えく芋(花咲)				
百 姓 伝 記	1688以前	遠江・三河	えごいも、嶋いも、 青から				とうのいも
農 業 全 書	1697						
本 朝 食 鑑	1697		えごいも 薺芋、青芋	栗芋			
筑 前 国 続 風 土 記	1701	筑 前		栗芋			大芋(ほら芋)
耕 稼 春 秋	1707	加 賀					唐ノ芋(唐の芋、赤 すいき)
大 和 本 草	1709			蓮芋(栗芋)			大芋(ホラ芋)
和 漢 三 才 図 会	1712		エグイモ エグ 青芋(薺芋、2種類)		クワイモ 粒芋		唐芋
菜 譜	1714			くりいも(はす芋)			大芋(法螺芋)
物 類 称 呼	1775						唐芋(女芋)
農 事 弁 略	1787	甲 斐					
私 家 農 業 談	1789	越 中		栗芋(蓮芋)			
本 草 綱 目 啓 蒙	1803—1806		青芋(サトイモ、ハ タケイモ、エグイ モ、ハタイモ)				紫芋(トウノイモ、ラ ンナイモ、アカイモ、 クロドウ、ボドウ) 連禪芋(ホライモ)
成 形 図 説	1804		シロイモ シロイモ 霜芋(島芋、根芋、 エグイモ シロイモ 薺芋、芋卵)	クリイモ 栗芋			サンゴイモ 首頭芋
農 家 業 状 筆 録	1804—1817	伊 予					
粒 々 辛 苦 録	1805	越 後					
農 業 談 拾 遺 雑 録	1816	越 中					
山本家百姓一切有近道	1823	大 和					
北越新発田領農業年中行事	1830	越 後					とう芋
本 草 図 譜	1830—1844		えくいも 青芋(さといも、は たけいも、あおから)	ひやくくはう 百果芋(くりいも)			紫芋(あかいも、と うのいも、あかか ら)
砂 畠 菜 伝 記	1831	筑 前				長崎いも(南京い も、上座芋)	
農 要 録	1835	肥 前					
耕 作 仕 様 書	1839—1842	武 蔵	いごいも(花いも)	栗いも(小さいも、股 黒)			とうの手、赤から 芋
農業功者江御門下ケ十ヶ條…	1841	周 防					
農 業 年 中 行 事	1851	周 防					
亀 尾 曙 圃 栄	1855	松 前					
草 木 図 説	1856—1862		エグイモ、ホイモ			ヤマトイモ(アイサ)	タウノイモ(紫芋)
菜 園 温 古 録	1866	常 陸					

				未判別品種
八つ頭	みがしき	溝芋	蓮芋	
実赤芋			八花芋, 霜芋(露芋)	はう子芋, 大芋, 白唐芋, 黒唐, つし芋, 真芋, 柄白芋, 永芋, 丸芋
				白芋, 黒芋, 唐芋
				唐ノ芋
			しろいも(しれ芋)	大しんずい, 小しんずい, 小いも, とふ芋, くりいも
				蓮いも, くりいも, 十里いも, はじかみいも, つくみいも
			はすいも しろいも 蓮芋(白芋)	つるの子, 栗いも, 赤いも(赤芋), 大いも
			はすいも 蓮芋	
			白芋	青芋, 黒芋, つるの子(大つる, 子つる), 赤芋, 野芋
				里芋, 真芋
			唐芋(白芋)	ツルノコ(大小2種類), 青芋, 黒芋, 赤芋, 野芋
			蓮芋	真芋
			白芋(唐芋)	つるの子, 青芋, 黒芋, 赤芋, 野芋
				蓮芋(ハツがしら, 栗芋)
				白芋, 嶋芋, とふの芋
				白芋, 赤芋, 真芋(蔓ノ子芋), 青芋, 黒芋, 大芋, 法螺芋, 紫芋, 水芋
			白芋(ハスイモ, ク リイモ)	真芋, 野芋(<i>Alocasia macrorrhiza</i> Schott)
八頭芋(八口, 親 せ賀美芋, 切芋, 赤鵞芋)	美賀志伎芋(野菜 芋, ひき芋)		蓮芋(蔓乃芋, 白 芋)	鶴児芋, 早芋, 赤芋(赤いも, 紫芋), 都芋, 真芋, 蔓乃芋(頭乃芋), 穴芋, 海芋(石芋, 毒芋, 芭蕉芋, 野芋)
			蓮芋	里芋, からくろ
			とう芋	
				青芋
				まいも, 唐の芋, をやせいも
			蓮いも	から喰ひいも
九面芋(やつかし ら)		水芋(みついも, ミ やこいも, たけい も)	はすいも 白芋(しろいも, く りいも)	くろいも(くろから), 野芋(いしいも, くはすいも, とくいも)
			白芋(はすいも, か らいも)	里芋(鶴ノ子(親抱き)), 赤いも
				里芋, 赤芋
八ツ頭いも			蓮芋(5種類中の 1種類)	わせ芋(夏芋), とたり(つるの子, はかいも), 蓮芋(4種類)
			蓮芋	白芋, 赤芋
				里芋, 赤芋
				白芋
ヤツガシラ(九面芋)			ハスイモ(白芋)	マイモ, オヤセタゲ, エグナイ, タケイモ(槐薯芋)
				早芋, 蓮芋

芋の収量が多いことを述べている。また、第3表には土垂群の‘早生丸土垂’及び‘早生長土垂’の同種異名または類似品種として‘早生芋’があげられている。『成形図説』と『菜園温古録』の「早芋」及び『耕作仕様書』の「わせ芋」（「夏芋」）は、恐らく石川早生群あるいは土垂群に属するものと考えられるが、判別できない。なお、青葉²⁾、熊澤²³⁾及び高柳⁴³⁾は『成形図説』の「早芋」を石川早生群と土垂群を併せた群に属するものとしている。

以上の同定結果を一括して表示すると第5表の通りとなる。現存品種群に属するものとして判別できた品種を記載した資料数は、蓮芋群については18、唐芋群13、藪芋群11、蓮葉芋群8、八つ頭群5、赤芽群2、黒軸、みがしき、溝芋の各品種群1であった。

判別数が多い品種群は、一般に、渡来の時期が古く、芋と葉柄が共に食用となり、分布範囲が広く、判然と区別できる特性を有し、それらの特性が明確に記述されているものであった。

蓮芋、藪芋、八つ頭の各品種群に属する種類は、1629—1654年に伊予で成立したわが国最古の農書『清良記』に記載があり、唐芋群は1688年以前に遠江・三河で成立した『百姓伝記』に、また、蓮葉芋群は1697年に江戸で刊行された『本朝食鑑』に初めて記載されている。

江戸時代の農民にとって、サトイモが五穀に次いで重要な作物であったことは『百姓伝記』その他からうかがうことができる。しかし、このことは、単に、『菜譜』などで述べられているように、サトイモが凶年に飢をしのぐ作物としてだけではなく、六公四民などの藩制による年貢米の収奪が厳しく、農民は半年以下の自給飯米の保有しか許されず、その不足を補うものとして、サトイモが主食あるいは糧飯の主要な食材となりうる特性を有していたからであろう。

『老農類語』はこのことについて、「菜ノ類ヲ飯ノ代リニ食スルニハ、穀類ヲ交ヘズシテ叶ワス、穀類ヲ交ヘスシテ飯ノ代リニ成ルハ芋〔サトイモ〕ノミナリ」と端的に述べている。

江戸時代のサトイモは、芋を主食、主食の代用、副食物とする他に、葉柄、時には葉身までも生で糧菜や青物として用い、その乾燥物を糧菜や副食物にするなど、その利用が多岐にわたっていた。また、「根芽芋」の言葉や「藪芋」の異名として「根芋」がみられるように、芽芋としても利用されていたものと推察されるが、恐らく、野菜などの早出し限界を定めた徳川禁令²⁾などの影響で、『成形図説』と『本草図譜』にその栽培法が述べられている以外は、他の資料には芽芋に関する記述はみられない。

芋が生食できるかどうかだけでなく、葉柄が食用に適するかどうか、多くの資料が藪味について述べていることから、葉柄に対する関心の深さがうかがわれる。『清良記』などには、葉の収量が多い品種の栽培を奨励すると共に、葉柄を利用する品種については特別に項を設けて、その栽培法や貯蔵法が詳述されている。

明治時代になって、在来のもとは異なる種類の蔬菜が外国から導入されて生産されるようになり、サトイモの葉柄の青物としての価値が低下したものと思われるが、江戸時代には端界期の青物として、サトイモの葉柄が占める割合は、国分²⁰⁾が述べているように、屋久島、種子島、鹿児島に限らず、全国的にも高かったものと考えられる。このような理由からも、葉柄用の「蓮芋」や、芋、葉柄ともに利用できる唐芋群、藪芋群、八つ頭群に属する品種を記載した資料が多いものと考えられる。

第3表の15品種群のうち、沖縄青茎、石川早生、土垂、薑芋、檳榔芯、筍芋の6品種群に属する品種は、資料には全く記載されていないか、記載されていたとしても現存品種との関係を明らかにすることができなかった。沖縄青茎群の「沖縄青茎」、檳榔芯群の「檳榔芯」、「檳山芋」、紅檳榔芯、及び筍芋群の「筍芋」は、沖縄を除くわが国への導入の時期がいずれも明治時代以降といわれ²³⁾ 27)、これらの品種の記載は昭和時代になって初めて行われている。また、たとえ明治時

代以前に導入されていたとしても、'沖縄青茎'は匍枝で繁殖し、ほとんど芋は形成されず、葉柄の質も悪く²⁷⁾、栽培地が暖地の一部に限られていたと推定される。また、'檳榔芯'や'筍芋'は晩生で、暖地でしか栽培できないうえに、他品種群に属する品種と比較して判然とした特性を有していることから、資料にそれらの特性が明記されているとすれば、容易に判別できたものと考えられる。従って、これらの品種群に属する品種は資料上からは明治時代以前に沖縄を除いた地域へ導入された可能性は極めて低いと考えても間違いではないように思われる。

石川早生群について、熊沢・本多²¹⁾は「本邦の古来品種中、石川早生群は、その理由は不明であるが、中国には一般に分布が見られず、台湾に於て現存するものは近年の導入にかかるもので、古来の分布は見られない」と記し、篠原・富樫⁴¹⁾は「大阪府下南河内郡石川村^{ワサイモ}の原産で、関西方面に多く栽培されている」と述べている。また、大和⁵²⁾は『成形図説』の「早芋」に関する記述を参考とし、当時、「既に石川早生の系統分化があったものと見られる」と述べ、飛高¹⁰⁾は、「石川早生」は「本邦で黒軸か土垂の芽条変異で生じたのかも知れない」と推測している。また、Hirai *et al.*¹³⁾は、球根の貯蔵タンパク質の電気泳動パターンが黒軸群と「石川早生」が同じことなどから、「石川早生」は黒軸群から突然変異によって生じたものと推定している。さらに、第3表にみられるように、石川早生群に属する品種の数は極めて多い。このようなことを総合すれば、この品種群に属する品種は明治時代以前から存在していたものと考えられる。

土垂群の「土垂」について、大和⁵²⁾は「早くから埼玉県鳩ヶ谷地方で作られていたので鳩ヶ谷芋とも呼ばれ、関東地方一帯に普及していた」と述べている。この「鳩ヶ谷芋」については福羽⁹⁾も記載している。土垂群は15品種群のなかでも最も多くの品種を含んでいるので、この群に属する品種は明治時代以前に導入されていたものと考えられる。

石川早生群と土垂群に属する品種は、子芋や孫芋の着生が多く、草丈が比較的に低く、葉柄が淡緑色で、一見して両群を判別することは容易ではないが、子芋や孫芋の着生状態や葉鞘縁部の着色などを比較すれば互に異なっている。しかしながら、資料にはこれらの特性についての明確な記述がなく、「真芋」や「鶴の子」、「早芋」などは両品種群のいずれに属するか判別することができなかった。

第3表には薑芋群として「薑芋」だけがあげられているが、奄美大島にはこの品種群に属する「きりん」がある⁴³⁾。調査した資料にはこれら両品種の記載は全く認められなかったが、『産物帳』では沓岐国で「薑芋」が、また、筑前国福岡領では「しやうがいも」が「八がしらいも」とは別項に記載されているので、「薑芋」は江戸時代中期には栽培されていたものと考えられる。

以上のことから、第3表の15品種群のうち、沖縄青茎、檳榔芯、筍芋の3品種群を除いた12品種群に属する品種が江戸時代までにわが国へ導入されていたものと考えられる。

資料に記載されたサトイモの品種数は全体で約80であった。これらの品種を単純に品種としてみれば、現存品種数約140のほぼ60%に相当する。しかしながら、江戸時代の特定な時期における確かな品種数について記した資料はない。ただ、江戸時代前期の『会津農書』は4品種をあげて「此外品々アリ」と記し、『百姓伝記』は「里芋の種〔品種〕、其数多し」と述べて9品種をあげたうえで、「其外、葉さまも、から〔葉柄〕の色も、芋の形もさまざまかハリたるか多し」と述べている。江戸時代後期では、『成形図説』が「其ノ品〔品種〕数十名」と記している。

前述のように、江戸時代においては、サトイモの品種の概念は確立しておらず、資料によって異なっていた。「青芋」が『本朝食鑑』では数芋群の品種を、『和漢三才図会』では数芋群を指しているように、同一品種名が品種名と品種群を表している場合や「蓮芋」が『農業全書』では蓮芋群の「蓮芋」を、『大和本草』では蓮葉芋群の品種を指すように、同一品種名が互に異な

る品種群の品種名を表している場合がみられた。また、『会津農書附録』の「ゑく芋」が「花咲」とも呼ばれ、『本草綱目啓蒙』の「ハスイモ」が「白芋」あるいは「クリイモ」とも呼ばれるように、同一品種が異なる名称（同品種異名）で呼ばれていた。このような同品種異名あるいは類似品種名は導入時期が古く、分布範囲が広い品種群ほど多い傾向がみられ、その数は唐芋群、藪芋群、蓮芋群、蓮葉芋群がそれぞれ12, 11, 10, 5であった。

また、『成形図説』の「栗芋」が蓮芋群の「蓮芋」と蓮葉芋群の品種の両方を指すように、同一資料中の同一品種名が2品種群の品種名を表している場合もみられた。また、『清良記』では「蓮芋」と判別した「八花芋」と「霜芋」（「露芋」）を異品種として取扱い、さらには、12種類のイモ類としてヤマイモ、サツマイモ、コンニャクなどの種類をあげたなかにサトイモの品種「嶋芋」をあげ、種と品種との混同がみられた。このような混同は、他の資料では「野芋」としてあげられた場合を除いては認められなかったが、参考文献の『産物帳』では随所にみられた。

江戸時代の特定期間におけるサトイモの品種分布については調査した資料数が少なく、十分な知見を得ることができなかった。中期における品種分布は、『産物帳』に記載された約60品種を判別することによって明らかにできるものと考え、現在、同定中である。

摘 要

わが国にはサトイモの品種が同品種異名を含めて約140あり、それらは形態的特性によって15品種群に分けられている。

本報は、わが国におけるサトイモの品種の導入、分布、変遷に関する基礎的資料を得る目的で、江戸時代の農書及び本草書類に記載されているサトイモの品種を同定したものである。資料としては、山田龍夫ら編、農山漁村文化協会出版、1977—1989年刊の『日本農書全集』全35巻及び江戸時代の本草書類12編を用いた。

調査には、サトイモの品種を記載した資料から同一品種名を抽出し、それらについて記述されている特性と引用文献に記述されている特性及び著者らの現存品種についての調査結果とを比較検討した。品種及び品種群の同定は、主として熊澤三郎著『蔬菜園芸各論』のなかの名称に基づいて行った。

調査した125編の資料のうち、31編がサトイモの品種を記載し、その品種数は全体で約80であった。各資料に記載された品種数については、資料成立の時代や地域、あるいは、農書と本草書との間に明確な差は認められなかった。

一般に、判別された多くの品種を含む品種群は以下のようなものであった。すなわち、1) 芋と葉柄が共に食用となり、2) 他の品種群よりも導入時期が早く、3) 広く分布し、4) 形態的に判然と区別できる違いがあり、5) それらの特性が明確に記述されているものであった。

判別できた品種を記載した資料の数は、蓮芋群については18、唐芋群13、藪芋群11、蓮葉芋群8、八つ頭群5、赤芽群2、黒軸、みがしき及び溝芋の各品種群が1であった。

沖縄青茎、石川早生、土垂、薑芋、檳榔芯及び筍芋の6品種群に属する品種は、資料に全く記載されていないか、記載されていたとしても現存品種との関係を明らかにすることができなかった。しかしながら、沖縄青茎、檳榔芯及び筍芋の品種群の品種を除いた12品種群の品種は、引用文献の記述から、江戸時代までにはわが国へ導入されていたものと考えられる。

蓮芋、藪芋、八つ頭の各品種群に属する品種は、1629年から1654年までの期間に伊予（愛媛県）で成立したわが国最古の農書『清良記』に記載があり、唐芋群の品種は1688年までに遠江・三河（静岡県・愛知県）で成立した『百姓伝記』に、また、蓮葉芋群の品種は1697年に江戸（東

京都)で刊行された『本朝食鑑』に初めて記載されていた。

引用文献

1. 青葉 高 (1976). 北国の野菜風土誌. 東北出版.
2. 青葉 高 (1983). 日本の野菜 葉菜類・根菜類. 八坂書房.
3. 青葉 高 (1984). 農書から見た野菜園芸技術. 農及園 59, 381—386.
4. 青葉 高 (1987). 石芋伝説のサトイモについて. 農耕の技術 10, 74—88.
5. De Candolle, A. (1883). 加茂儀一訳. 栽培植物の起源. 1991. 岩波書店.
6. 深根輔仁 (918). 本草和名. 正宗敦夫編・校訂. 覆刻日本古典全集. 1978. 現代思潮社.
7. 藤原時平 (927). 延喜式. 正宗敦夫編・校訂. 覆刻日本古典全集. 1978. 現代思潮社.
8. 林 羅山 (1612). 中田祝夫・小林祥次郎著. 多識編自筆稿本刊本三種研究並びに総合索引. 1977. 勉誠社.
9. 福羽逸人 (1893). 蔬菜栽培法. 松原茂樹編. 明治農書全集. 第6巻. 1984. 農文協.
10. 飛高義雄 (1955). 里芋の品種分類と育種. 浅見与七博士還暦記念出版会編. 園芸技術新説. 539—548. 養賢堂.
11. Hirai, M., T. Sato and K. Takayanagi (1989). Classification of Japanese cultivars of taro (*Colocasia esculenta* (L.) Schott) based on electrophoretic pattern of the tuber protein and morphological characters. *Japan. J. Breed.* 39, 307—317.
12. 本多藤雄 (1986). ヤマノイモ. 西 貞夫監修. 野菜種類・品種名考. 204—211. 農業技術協会.
13. 井上頼寿 (1968). 改訂京都民俗志. 平凡社.
14. 石井勇義 (1956). さといも属. 石井勇義編著. 園芸大辞典2. 1016—1023. 誠文堂新光社.
15. 門田寅太郎・谷川 茂・壁谷弥伝 (1944). 本邦里芋品種の特性と其の分類. 園学雑. 15, 117—134.
16. 川崎重治 (1979). 葉柄を食べるサトイモ 山津水芋. 農耕と園芸編. ふるさとの野菜. 297—300. 誠文堂新光社.
17. 喜田茂一郎 (1915). 蔬菜園芸全書. 嵩山堂.
18. 北村四郎 (1980). 本草図譜解説. 同朋舎出版.
19. 北村四郎・塚本洋太郎・木島正夫 (1986). 本草図譜総合解説. 第2巻. 同朋舎出版.
20. 国分直一 (1970). 日本民族文化の研究. 慶友社.
21. 熊沢三郎・本多藤雄 (1954). 里芋に於ける芽條変異と品種造成に対する考察. 育雑. 3, 19—21.
22. 熊沢三郎・二井内清之・本多藤雄 (1956). 本邦における里芋の品種分類. 園学雑. 25, 1—10.
23. 熊沢三郎 (1967). 蔬菜園芸各論. 養賢堂.
24. 倉窪保雄 (1940). 天南星科植物の染色体数. 植及動. 8, 1492.
25. 李 璠 (1984). 芋. 李 璠編著. 中国栽培植物発展史. 124—125. 科学出版社.
26. 前田義徳 (1932). 芋の細胞学的研究 (予報). 日作紀. 4, 315—318.
27. 松原茂樹・飛高義雄 (1970). Satoimo. 最新園芸大辞典編集委員会編. 最新園芸大辞典. 2467—2475. 誠文堂新光社.
28. 源 順 (931). 倭名類聚鈔. 正宗敦夫編・校訂. 覆刻日本古典全集. 1978. 現代思潮社.
29. 宮崎貞巳・田代洋丞・金澤幸三・柳川政雄・田原 稔 (1986). サトイモの種芋及び幼植物に対するジベレリン酸処理による開花促進. 園学雑. 54, 450—459.
30. 宮崎貞巳・田代洋丞・竹下昭人 (1987). サトイモのジベレリン酸処理した株の開花. 佐賀大農彙. 63, 1—14.
31. 三好保徳 (1978). 「親民鑑月集」の中の植物について (I). 聖カタリナ女子短大紀要. 11, 112—146.
32. 三輪忠珍・倉窪保雄 (1942). 里芋の細胞学的研究 (豫報). 園学雑. 13, 42—45.
33. 盛永俊太郎・安田 健 (1986). 江戸時代中期における諸藩の農作物——享保・元文諸国産物帳から——. 自費出版.
34. 中尾佐助 (1976). 栽培植物の世界. 中央公論社.
35. 野本寛一 (1987). 焼畑文化の形成. 大林太良編. 山人の生業. 119—178. 中央公論社.

36. 刘 佩瑛 (1987). 芋. 中国農業科学院蔬菜研究所編. 中国蔬菜園芸学. 319—326. 農業出版社.
37. 佐々木高明 (1988). 日本における焼畑農耕の成立をめぐる. 佐々木高明・松山利夫編. 畑作文化の誕生. 1—22. 日本放送出版.
38. 志茂正人 (1991). みがしき. 農耕と園芸. 46 (9), 123.
39. 下川義治 (1916). 実験蔬菜園芸. 成美堂.
40. 下野敏見 (1973). 田芋の栽培と儀礼——田芋列島の田芋民俗——. 民俗学評論. 10, 840—863.
41. 篠原捨喜・富樫常治 (1951). 蔬菜園芸図編. 養賢堂.
42. 白井光太郎 (1929). 植物渡来考. 岡書院.
43. 高柳謙治 (1989). 塊根類 サトイモ. 松尾孝嶺監修. 植物遺伝資源集成. 第2巻. 809—814. 講談社.
44. 竹下昭人・宮崎貞巳・田代洋丞・柳川政雄・田原 稔 (1991). 佐賀県鳥栖市に自生しているサトイモについて. 佐賀大農彙. 71, 113—122.
45. 谷本忠芳 (1990). 本邦および台湾における野生サトイモ (*Colocasia esculenta* Schott) の分布および形態的特性. 育種. 40, 233—243.
46. 富樫常治 (1944). 蔬菜栽培講義. 養賢堂.
47. 坪井洋文 (1979). イモと日本人——民俗文化論の課題——. 未来社.
48. 筑波常治 (1987). 日本の農書. 中央公論社.
49. 上野益三 (1973). 日本博物学史. 平凡社.
50. 上山春平・佐々木高明・中尾佐助 (1976). 続・照葉樹林文化. 中央公論社.
51. Vavilov, N. I. (1951). 田中正武著. 栽培植物の起原. 1977. 日本放送出版.
52. 大和茂八 (1986). サトイモ. 西 貞夫監修. 野菜種類・品種名考. 190—204. 農業技術協会.
53. 野菜試験場育種部 (1980). 野菜の地方品種.
54. 吉川宏昭 (1986). ショウガ. 西 貞夫監修. 野菜種類・品種名考. 211—214. 農業技術協会.
55. 吉野照道 (1973). 東ネパールにおけるサトイモ族 Tribe Colocasieae の野生種と栽培種について. ヤルン・カン学術調査報告. 47—61. 京都大学学士山岳会.
56. 張 谷曼・楊 振華 (1984). 中国芋の染色体数目研究. 園芸学報. 11, 186—190.